

帝國讀本

改制新版

卷八

375.9

Ha7

資料室

41601

教科書文庫

4

810

41-1938

200030/814

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8 cm 1 2 3 4 5 6 7 8

2 1 20 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

文部省檢定濟

昭和三十一年一月十一日 中國語文教科

資料室

3759
H27

帝國讀本

改制新版

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年
文學士 長谷川福平 訂補

合資會社 富山房發兌



Handwritten notes in cursive script (sōsho) on the right page, including the characters '帝國' (Empire) and '日本' (Japan).



安宅林雲鳳筆



言本



録
山
後
新
文

古池やははすこびこむ水の音。

帝國讀本 改制新版 卷八

目次

一 平安京	藤岡作太郎	一
二 百蟲譜	横井也	六
三 落葉を焚く歌(詩)	河井醉茗	二
四 若き友よ	永井潜	四
五 科學と人生(自修文)	永井潜	三
六 熊野落	(太平記)	元
七 石濱の雨	加藤千蔭	三
八 詩人西行	藤岡作太郎	三
九 [まこと]	相馬御風	四

九 枯野(俳句)..... 四九

一〇 十六夜日記..... 阿佛尼 五〇

一一 長柄堤の訣別..... 坪内逍遙 五〇

一二 光頼卿の参内..... (平治物語) 五〇

一三 神武天皇と後醍醐天皇..... 幸田露伴 七一

一四 新葉集の歌(自修文)..... 大町桂月 七

一四 父と母(短歌新調)..... 岩城準太郎 八二

一五 古典の研究..... (伊勢物語) 八九

一六 小野の御室..... 鴨長明 九二

一七 方丈記その一..... うたかた 九三

 うたかた..... 九三

 安元の大火..... 九三

 治承の辻風..... 九五

都うつり..... 九五

養和の飢饉..... 九六

一八 方丈記その二..... 鴨長明 九九

 わづらひ..... 九九

 閑居..... 一〇三

 文章の出来ぬ時(自修文)..... 幸田露伴 一〇六

一九 安宅(謡曲)その一..... 一一二

二〇 安宅(謡曲)その二..... 一一八

二一 歌謡と國民精神..... 藤田徳太郎 一二五

二二 揚雲雀(俳句)..... 一二三

二三 世界を巡りて..... 沖野岩三郎 一二三

二四 光は日本より..... 高須芳次郎 一二三



(一)國文學者
市博の博士。金澤
年四十七。明治
四十七年(一九一
四)年十一月二
日歿。

幽婉

(二)高尾、鷹雄と
も書く。

帝國讀本 改制新版 卷八

一 平安京

(一)藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり。東亞のイタリ一なり。山川の風景往く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚めたるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの。規模の雄大豪壯なるものは存せずと雖も、秀麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡如意ヶ嶽より三の峯まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬貴船氷室鷹ヶ峯高雄の山々波濤の如く、西に稍隔りて愛宕小倉龜山嵐山松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明ヶ嶽、春尙雪白き比良

宮柱太知る

の遠山などは、わけて朝日夕日に照映ゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂ヶ岡、北の船岡、西の雙ヶ岡は、大和の畝傍香具山、耳成の如く相並びてあらねど、子の日の遊に小松ひく楽しみなど、何れ劣らぬ所がら、南に稍隔りて男山これに對し、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。

(一)大堰川の下流、桂の渡から下をいふ。
(二)嵐山の下を過ぎて桂川は賀茂川に合する。
(三)淀川。

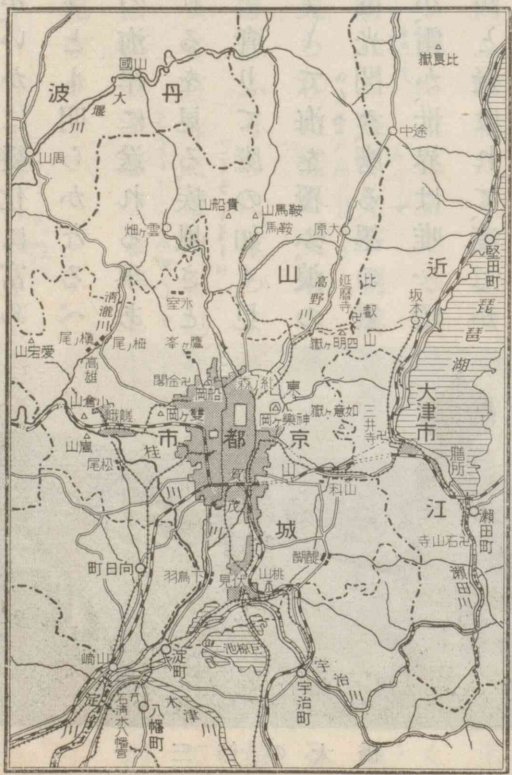
京の東端には賀茂川の流、糺の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に桂川、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しくまた南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋 ぼうやう
浩蕩 こうたう
跌宕 だつたう
長所なくんば
あらず

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるもの少しと雖も、一面より言へば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出て入る白帆の、町の側を往來する眺なき代りに、濁りの底の

明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海その物は清けれ

ど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などをる所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬ事多し。京都に海なきは惜しむべしと雖も、海なくして清き京都は益清きなり。

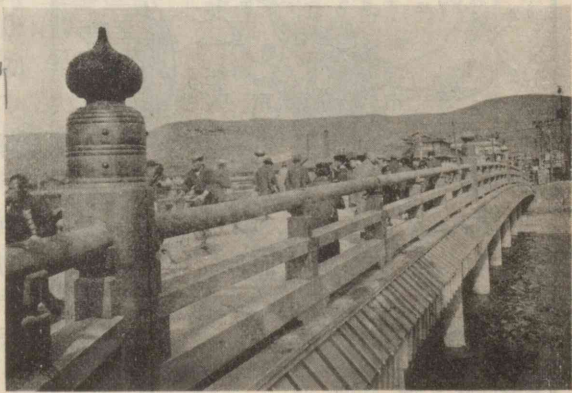


山紫水明の語はよく京都の景色を言表せり。いづこの山水も、日

黒雲魔の如し

(一)京都市下京區。

中よりは朝夕の姿態の面白きは水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして土地濕潤に、水分を含む事殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。曾て一夏を北陸の海岸に送れる事ありき。一日驟雨の至れるを見る。疾風と吹き、浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり、て海を覆ふ。浪の音は雲の中にあり。電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散す。浪か、雷か、世界は唯一暗黒の中に没し去るかと思はれて、凄じかりき。かくの如き壯絶なる景は、我が數年滯留中、遂に京都にては見る事を得ざりしところなり。されど下京



橋大の條三

(一)左京區。

あるかなきか
の夢より未だ
覺めやらす

(二)東山區。

より吉田に通ひたる朝な夕の景色は、今も尙彷彿として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つ、彼方へ彼方へと淡くなりて、向ふに寝たる東山は、あるかなきかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞ先づ朝靄を洩れ來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ、愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちにはらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも晴れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は山河襟帶の平安京の特色なり。

山が襟の揺りめぐりくのせりりりか、雲の揺りはよこるのほ——國文學全史——

(一)江戸時代の俳人。名は時般、半掃庵と號し。天明三年(一八四三年)歿、年八十二。

(二)莊子に「昔者莊周夢爲二蝶、蝶一云々」とある。

二百蟲譜

系圖(字)

蝶の花に飛交ひたる、優しきものの限りなるべし。それも啼く音



莊周(橋本雅邦筆)

の愛なければ、籠に苦しむ身な
らぬこそ、なほめてたけれ、さて
こそ、莊周が夢も、このものには
託しけぬ。たゞとんばうのみこ
そ彼には、稍くらぶらめど、絲に
つながれ、もちにさゝれて、童の
もてあそびとなるこそ、うたて

子を持てる者はその恩愛にひかされてこそ苦勞はすれ。蜂の他の蟲を取りて我が子となす、老の行方をかゝらんとにもあらず、何

(一)「花になく鶯水に住む蛙の聲をきけば、生きたし生けるもの何れか歌を詠まざりける云々。」
(二)「古池やかはづとびこむ蕉の音。」
(三)「やがて死ぬけしきは見えぬ蕉の聲。」

を譲らんとてかくは骨折るや。我に似よくとはいかにおのが身を思ひあがれるにかあらん。花に狂ずるとは詩人の稱にして、歌にはさしも詠まざりて、掃除坊主をおびやかさんとす。その薬師堂に大きな巣つくりて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば人には憎まれじを。
蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸ひなれ。朧月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものの事、更にも誇り難し。
蟬は唯五月晴に聞初めたる程がよきなり。稍日盛に啼きさかる比は、人の汗絞る心地す。されば、初蝶とも、初蛙とも、言ふ事を聞かず。このものばかり初蟬と言はるゝこそ、大きな手がらなれやがて死ぬ氣色は見えぬと、このものの上は、翁の一句に盡きたりと言ふべし。

晉の車胤

螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛交ひ、草にすだく。五月の闇は唯このもの爲に、やとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者にとられて油火の代にせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。
● ひぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。

つくづく、ほふしといふ蟬は、つくしこひしとも言ふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと世の諺に言へりけり。哀れは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛は巧に網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。歌によまれ、または退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありて、いと憎し。古代朝敵の初として、頼光をさへおびやかしたる、いと恐し。さは

源頼光、武將、鎮守府將軍、滿仲の子、射を善くした。治安元年(一六八一年)歿。

蜀魂

楚

南

千楚、槐の下に寝、南門、

言へ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝか哀れ添ふ心地もせん。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すにか。蜉蝣ははかなき例に引かれ、たて食ふ蟲は物好の謗となれり。同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。

● 蟻は明暮にいそがしく、世の營にひまなき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得ん。さるもたより悪しき方に穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蝸牛は唯水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。蟻螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

葉守の神

夜にうるほひし露霜も、
一葉一葉に乾きゆく
烟のかげに立ちそひて、
葉守の神やあらはれん。

眞夏大野を覆ひたる

國つ鎮めの公孫樹、

光に透いて金葉の

みな地に落つるひゞきかな。

櫻の精はとほ春の

海を渡りて去ににけり。

朽ちてはかるき乾き葉の

梢はなるゝ力かな。

常^{とき}緑なるべき檜葉、杉葉、

うらがれたるがめらくと、

火になりやすき秋のはて、

地の美は空にをさまらん。

機にかゝれる織ぎぬの

自然のあやのまばゆきも、

捲かるゝまゝに彼方なる

はてしなき手に渡されぬ。

あゝ落つる葉に驚きて、

うらがる

烟をあぐる庭守よ、
萬葉焚いて盡きせざる
林に入らばをのゝかん。

— 醉茗詩集 —

四 若き友よ

永井潜

若き友よ、世界は勇者に屬すといふドイツの格言を知るか。アラ
イ・シエップルの言に、「人生に於て心及び體の勤勞なくしては、一事の
果を結ぶなし。努力し、尙努力する、これぞ實に人生なる」といふ名句
がある。またビュフォンは「天才とは忍耐の事なり」と言つてゐる。誠にそ
の通りである。人一たび勇氣の帆を揚げ、努力の權を揮ひ、堅忍の舵
を握る時、いかなる人生の狂瀾怒濤をも乗切つて、船を確實に成功
の彼岸に到達せしめる事が出来るのである。しかもこの勇氣も、努
力も、忍耐も、皆剛健鞏固な意思から生れ出るものである事を念ふ

(一)生理學者、醫學博士、東京帝國大學教授、長國大學醫學部長、明治九年廣島縣に生れた。
(二)フランスの畫家、(西紀一七八五年)一八七九年。
(三)フランスの自然科學者、哲學者、(西紀一七七八年)一七八八年。

成功の彼岸

時、意思は人格の中心であり、意思即ち人であるといふ事が出来る
のではないか。

若き友よ、剛健な意思は、いかなる境遇の下にも絶えず人をして
前進せしめ、向上せしめるのみである。叩けよ、然らば啓かれん。強き
意思は強き希望を喚起し、強き希望は強き豫想を招來し、強き豫想
はよく「可能」を變じて「實在」となすのである。フランスの一青年士官
が「余はフランスの元帥たらんと志す。大將軍たらんと志す」と言ひ
つゝ、その部屋を歩むを常としてゐたが、後年彼は遂に元帥となつ
た。嘗て一指物師が、高官の椅子を特に心を用ひて修復してゐた。人
が偶、そのわけを問うたところが、答へて言ふには、「自分が他日この
椅子に掛ける時に掛けよいやうにせんが爲である」と。不思議にも
彼は遂にその椅子の主人公となつたといふ挿話が、スマイルズの

實在

(一)イギリスの傳記作者、(西紀一七八二年)一八〇四年。

自助論に載せられてある。

若き友よ、剛健な意思を持つ者は幸なるかな。彼にあつては失敗即ち成功である。彼には困難が最良の師となり、窮乏が最愛の友となるのである。試に香氣ある草を手にとつて見よ。これを揉む事愈、強うして、その香氣は益、高くなるではないか。⁽¹⁾リヒテル曰く、「人は貧苦の下にあつても、何等つぶやく必要はない。處女の耳に穴を穿つ痛みの後に、寶玉を懸け得る歡のある事を思へ」と。

將軍を試煉する者は、戰勝よりも戰敗である。漢の高祖は連戰連敗して、しかも支那を統一し、ワシントンもまた、戰に勝つよりも負ける事が多くて、しかも米國を救つたではないか。人生の戰に於て一度敗れ、二度敗れ、三度敗れたとて、斷じて失望落膽してはならない。敗慘がなければ勝利はなく、困厄がなければ成功はない。人生の

⁽¹⁾ドイツの文學者。西紀一八七三年—一八七五年

⁽²⁾アメリカ合衆國の軍人で政治家の大家。第一代大統領。西紀一七九九年—一八〇九年

⁽¹⁾イギリスの外。西紀一八二八年—一八八五年

⁽²⁾「天將降大任於斯人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行拂亂其所爲。」(孟子告子篇)

行く手に横たはるいかなる障礙も、努力と堅忍とによつて征服されないものはないと確信せよ。さうして勇氣を鼓舞せよ。尋麻は大膽にこれをつかむ時、絹絲のやうに軟かであるのである。艱難は神の命令によつて我等の上に置かれた峻嚴な教師である。神は親の如き保護者、教誡者で、我等が我等を知るよりも尙よく知り、我等が我等を愛するよりも尙よく愛す」と言つた。パークスの言を思へ。天將降大任於斯人也、必先苦其心志」と言つた孟子の教を玩味せよ。

若き友よ、各人自らが王者であり、自己の支配すべき王國を持つてゐるではないか。その王國は即ち自分自身であり、その支配者は即ち自由な意思である。自由といふのは、斷じて放縱を意味するのではない。我等の意思は、水に浮べる浮草の水の流のまに、昨日は東、今日は西といふやうなものではなくて、剛健な水泳者が、自己

(一)ギリシヤの哲
基(一)西紀前
四七〇年一三
九九年)

の力によつて勇往驀進し、波を切り流に遡つて、自ら欲する目的の
地點に向はんとする意味に於て確かに自由である。自由は責任を
伴ひ、支配は義務を負はしめる。我等は我等の剛健な意思を試煉
すべく、我が王國を支配しなければならぬ。ソクラテースの言つ
たやうに、世界を動かさんと欲する者をして、先づ自己を動かさし
めなければならぬ。

若き友よ、青年が人生を歩むや、その路の兩側には、幾多の妖魔が
相並んで立つてゐる。彼等は或は笑み、或は媚び、或は脅し、或は迫り、
あらゆる手段を以て卿を試問し、誘惑しようとしてゐる。一たびう
ち負ける時、それは永遠の墮落である事を思はなければならぬ。
傍目もふらず前進せよ。勇らしく、唯勇らしく「否」を叫び、「否」を實行せ
よ。一步躊躇すれば、一步破滅の淵に近づく事を思はなくてはなら

(一)ギリシヤの大
詩人オヂセ
イの主人オ
イタカ王の
トイタカ王
の凱旋の途
中、暴風に
襲はれ、海
に溺れ、死
す。故郷に
歸るまひ、
冒険譚があ
る。

ない。オヂセウスが沃女の歌に耳を覆うて、一心不亂に漕いで漕い
で、巨巖相撃つて船を微塵に碎くといふ恐しい海門を漕抜けたや
うに、非常な勇氣と努力とを以てして、始めてこの恐しい魔手を振
りほどく事が出来るのである。甘い言葉は、卿の血脈に黴菌を注射
する針と思へ。唇に當つるに先立つて、勢よく杯を脚下に叩きつけ
よ。さうして序に、地獄の煙をつぎ込む煙管をも一擲せよ。かゝる時
卿は最も大なる敵よりもなほ打勝ち難い自己に克ち得たる言ひ
知れぬ歡を感じずるであらう。

若き友よ、神は桃源郷に達するまでに、勤勞と困難との門扉を置
いてゐる。尊徳翁の言に「天は萬物を生ずれども、人は自ら勤勞して
これを取り、これを作らなければ、その用をなす事が出来ない。それ
故に森林に方材なく、麻畑に織布がないのだ」といふ教訓がある。汗スウェット

(二)支那武陵の桃
源、陶淵明の
語、記から出
た花

(三)二宮尊徳、
稱金の人。通
仁徳の行をも
て名高い。二
政三年(一八
七〇年)歿。五
十六年(一八
七〇年)歿。

なければ甘味なし」といふ英國の格言がある。努力せよ。努力せよ。努力せよ。人生何の生きがひがあらうぞ。時正に新涼郊墟に入り、神澄み體蘇らんとしてゐる。剛健な意思を喚起し、旺盛な元氣を振作するに、今よりよい時はないのである。

顧て果物屋の店頭を見れば、紫水晶のやうな甲州葡萄が輝いてゐる。夜深うしてこほろぎ、草雲雀鈴蟲などの音が雨のやうに多い。文治建久の昔、雨宮勘解由が路傍に山葡萄を見附けて栽培を始め、甲斐の徳本が更にこれを改良して、遂に今日の盛を致したてはなにか。メーテルリンクをして「今の文明世界が持つてゐる至高至純の名譽の一つ、最も賢明な博物學者の一人、また近代的意思にての、そしてほんたうに正當な意味での最も靈妙な詩人の一人」とまで激賞せしめたアンリー・ファブルは、昆蟲に打込んだ彼の五十年の心血の結晶たる「昆蟲記」によつて、不朽の業績を留めたてはないか。

(一) 第八十二代
後鳥羽天皇の
御代

(三) ベルギーの文
學者。西紀一
八六二年に生
れた。

(四) フランスの博
物學者。西紀
一八二三年一
九一五年

あ、努力し、努力する。これぞ人生なる。この努力は、すべて剛健鞏固な意思の中から生れて来る。さうしてこれが眞に人の人たる所以であり、眞に人の貴い力でなければならぬ。——人及び人の力——

自修文

科學と人生

永井 潜

行けどく、到らぬ空を慕ひつゝ、
のぼるや人のこゝろなるらん

これは故大西祝博士の歌であります。人の人たる尊い所以は、眞と善と美とに憧れて、止み止まぬ心の働があるからであります。私はこの意味に於て學者を禮讚し、宗教家を禮讚し、藝術家を禮讚せんとするのであります。眞に偉い人の偉い所以は、富貴にあらざ、官爵にあらざ、權勢にあらざして、この尊い心の働にあるのであります。「仁義」といふ聖人の語も、「神は愛なり」といふキリストの教も、畢竟するに、自他の差別を超越して己の最善の努力を

(一) 哲學者、文學
の博士。岡山縣
三十三、明治三
六〇年、歿、二
三十七年

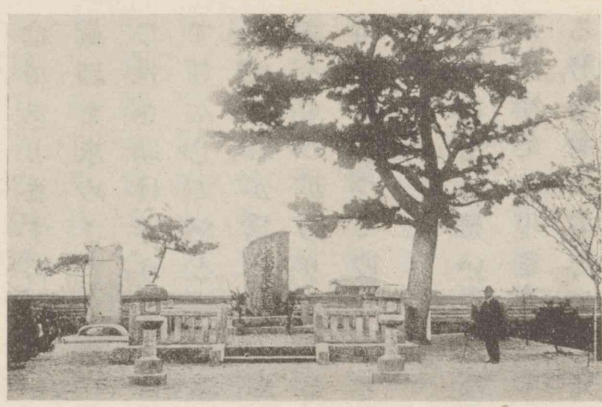
神の壇上に云
神と同じ列に
立ち得る、即
ち神の域に達
し得るの意
腰に云々
その體に何も
武器はつけて
ゐないのに、ど
大軍といへど
もこれをどう
する事も出来
ないやうな偉
大な力を現す
のである。

盡し、それによつて人生に貢献する事に外ならぬのであります。眞にその心持を體得してその行を爲す時、その人は神の壇上にさしまね磨かれた人でありました。たとひ頭髮は蓬の如く亂れ、身には襤褸らんろうを纏うてゐても、絶えずその身體からは金色の光が射して、長への人生の闇を照すのであります。腰に寸鐵を帯びないでも、百萬の甲兵も如何ともする事が出来ない偉大な力を現すのであります。皆さん、仰いで太陽を御覽なさい。その光は普く大宇宙に行きわたつて、あらゆる物に力と命とを與へて居ります。しかも東の山から西の海へと、毎日黙々としてその行程を繰返して居ります。しめやかな春の雨につぼみは花に、芽は若葉に、地上の萬物悉く恵に蘇るのであります。しかもそれは、高い／＼雲の中から、黙黙として降りそゞいでまゐります。蓋し眞に偉い人は、黙々として偉い事をしてをるのであります。

(一)第百十四代中
御門天皇の御
代(二、三、九、二
年)
いなご(蝗)
うんか(浮塵
子)

(一)愛媛縣伊豫郡
松前町。
謳歌する
衆人が聲をそ
ろへてその徳
をたゞへる。

今を去る二百餘年の昔、享保十七年に、いなごとうんかとの爲



にひどい饑饉が四國を襲ひました。その時、伊豫の國伊豫郡筒井村に百姓作兵衛といふ者があつて、一年の麥種子を持つて居りました。その父その子相農ついで斃れ、死は將に彼をも見まはんとした刹那さつなにも、彼は頑として人の勸之を斥けて、つひに麥種子の囊を枕にして餓死したのであります。作兵衛には、彼自身の命よりも、やがて國人の命のりとなるべき麥種子が大切であつたのであります。伊豫の國松前(一)に建てられた義農之碑は、黙々として、しかも最も雄辯に、日月をも貫く凜乎たる義民作兵衛の心を、永遠に謳歌してをるのであります。

麥種子を擁護せんとした義民の心、これ即ち眞理を擁護せんとする學者の精神であります。眞理こそ、學者に取つての唯一の命であります。否、命よりも尊い物であります。彼は唯眞理の爲に眞理を求め、さうしてその得たる眞理によつて、未來永劫人を救ひ、世を助け、さうして自らは何の得るところもなく、唯黙々として甘んじてをるのであります。螺旋や滑車は機械の基礎を爲す物で、これが爲に生産がいかに増大したか、實に測り知るべからざるものがあります。しかもそれを發明した學者は、決して專賣特許によつて彼の懷を肥してゐないのであります。否、その名前すらも夙に忘れられてをるのであります。種痘の發明によつて、何物にも替難い可憐な人の子の生命が、永代だけ多く救はれる事でありませう。しかもその發明者たるジェンナーが、いかなる努力を以てそれを完成し得たか、いかに多くの苦心を以て、怒罵と嘲笑とに耐へなければならなかつたか、それを知る人は甚

(イギリスの醫者(西紀一八七二—一八七三年)

究極最後の所。

功利主義
功名利欲をのみ専一とする主張。

言ふべく餘りに云々
明瞭すぎて言ふ必要がない。
利用厚生
世の便利と生活とを益すること。人民の厚くすること。

だ稀であります。抑、學術が眞理を求めて止まぬ人間の本性から生れ出たものである以上、學術の究極の目的は、どこまでも眞理の探求でなければなりません。眞理の爲に眞理を愛し、學問の爲に學問をする事が、學者の使命でなければならぬのであります。世には往々、功利主義、實用第一の立場から、學術の値うちを上下せんとする人があります。それは大なる誤解であります。もとより學術の進歩發達が人生を豊富ならしめ、自然を制御し、文化を増進し、國をして富强ならしめ、人をして高尚ならしめる上にいかに多大の貢獻を爲したか、それは言ふべく餘りに明瞭な事實であります。しかし、それだからと言つて、學術をもつて單に利用厚生具と爲し、その研究は、全然實利實益を追うて行はれるものと斷ずるのは、眞に學術を解し、學術を愛する人の言ふべき事ではないのであります。學術によつて知り得た理法を應用して、人間生活

終始する。
 つきてゐる。
 一貫してゐる。
 (一)イタリヤの都立大學は十二世紀に創立された。
 (二)イタリヤのボローニヤ大學は十四世紀に創立された。
 (三)イタリヤのトリノ大學は十五世紀に創立された。
 (四)イタリヤのフィレンツェ大學は十六世紀に創立された。
 (五)イタリヤのナポリ大學は十七世紀に創立された。
 (六)イタリヤのペルージャ大學は十八世紀に創立された。
 (七)イタリヤのボローニヤ大學は十九世紀に創立された。
 (八)イタリヤのトリノ大學は二十世紀に創立された。

の上に幾多の幸福と利益と愉悅とが恵まれる事は、勿論望ましい事でありますが、しかしそれは學術研究の自然の結果たるべきものであつて、決して究極の目的たるべきものでなく、またその動機たるべきものでもないであります。況や學術を種子として私利私益を圖り、聲名榮達を望まんとするが如きは、眞の學者たるべき者の最も恥とするところであり、眞の學者の全生命は、唯「眞理」てふ二字に終始してをるのであります。この眞純な動機によつて立ち、この眞純な目的を追うて進んでこそ、始めて曇なき清淨な眞理の源泉に到達し得るのであります。

イタリヤのボローニヤ大學の教授ガルバーニが、皮を剥いだ蛙をもつて空中電氣の實驗をなし、ついでボルタといふ物理學者がこれを追試し、遂に接觸電氣の發見となり、やがて電池が造られ、茲に電信、電話、電氣工業、電氣化學などの現代文明が、この人の世に持來されたのであります。人間の文化が地上に繁榮する

(一)ポロニアの天文學者、コペルニクスが、地動説を提唱した。西暦一五四三年。
 (二)ドイツの天文學者、ケプラーが、天動説を提唱した。西暦一六一〇年。
 (三)ドイツの天文學者、ニュートンが、万有引力説を提唱した。西暦一六八七年。
 (四)ドイツの天文學者、ガリレオが、天動説を提唱した。西暦一六10年。
 (五)ドイツの天文學者、ニュートンが、万有引力説を提唱した。西暦一六八七年。
 (六)ドイツの天文學者、ガリレオが、天動説を提唱した。西暦一六10年。
 (七)ドイツの天文學者、ニュートンが、万有引力説を提唱した。西暦一六八七年。
 (八)ドイツの天文學者、ガリレオが、天動説を提唱した。西暦一六10年。

限り、私たちは永遠にガルバーニやボルタに感謝しなければならぬのであります。またかのコペルニクス、ケプラー、ガリレオなどによつて、舊い天動説が顛覆され、新しい地動説がうち建てられた事は、實に近代科學の上に動かすべからざる礎いしきを据ゑたものであります。

さりながらその事が、直接富國強兵の上に、果してどれだけの寄與を致して居るでありませうか。また萬有引力説てふ大發見をなしたニュートン、及びニュートンを生んだ國民は、直接それによつて半錢の利益をも得てゐないではありませんか。一八八二年コッホが結核菌を發見し、翌年ドイツ政府の命によつて印度に赴き、コレラの研究を行ひ、その病原菌を發見して、意氣揚々としてドイツに歸つて成績を發表した時、衛生學の泰斗ベッテンコーフェルのみは、獨り頑強にこれに反對しました。そして自分の學說の正しい事を證明すべく、自ら進んでコッホのコレラ菌純培養液を

幕進する
まづしぐらに
進む。

呑んだのであります。彼は幸に軽い下痢を起しただけで、コレラには罹らなかつたが、彼はこれを呑まんとする刹那、從容として、「たとひ私が間違つてゐて、この實驗が私の命を脅すやうな事があらうとも、私は自若として死に赴く事が出來ます。何となれば、それは勝手な卑怯な自殺ではないからだ。健康と生命とは、世に尊い財寶であるに相違ないが、しかし、決して最も尊いものではない。禽獸の上に立つて萬物の靈長たるべき人間は、場合によつては喜んで生命をも犠牲に供する覺悟がなければならぬ」と。何といふ悲壯な覺悟でせう。何といふ尊い精神でせう。眞理に憧れて、幕進しつゝある學者に取つては、一身一家の利害得喪の如きは、全然眼中にないのであります。恰も闇黒の裡に輝く一點の光明を慕ひ來つて身を焦す蟲のやうに、眞理を求めて止むに止まれぬ心の渴仰を満足すべく、學者はすべてを犠牲に供して悔いないのであります。しかも黙々として横たはるこの尊い犠牲

の屍の中から、人生を恵むべき長へに萎む事のない美しい花が
咲出づるのであります。
(科學畫報に據る)

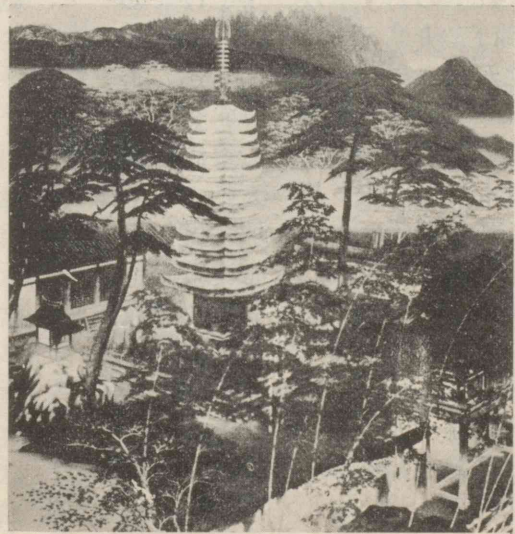
五 熊野落

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城既に落ちぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しと雖も御身を隠さるべき所なく、日月明らかなりと雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥すうづらの床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を尤むる里の犬に御心を悩まされ、いづことても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されけるところに、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

(一)護良親王。延暦寺の大塔にをられたので大塔宮といふ。
(二)奈良市外にある。律宗。
(三)元弘元年(一九一一年)九月二十八日。

(四)奈良興福寺の北にあつた同一寺の末寺の一。

をりふし宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて
 落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく兵既に寺内に
 討入りたれば、紛れて御出であ
 るべき方もなし。さらばよし自
 害せんと申し召して、既におし
 はだ脱がせ給ひたりけるが、事
 かなはざらん期に臨んで腹を
 切らん事はいと易かるべし。若
 しやと隠れてみばやと思し召
 しかへして、佛殿の方を御覽ず
 るに、人の讀みかけて置きたる
 大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの櫃は御
 經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の



般 若 寺 (東條隆光筆)

これ體

夢に道ゆく心
地

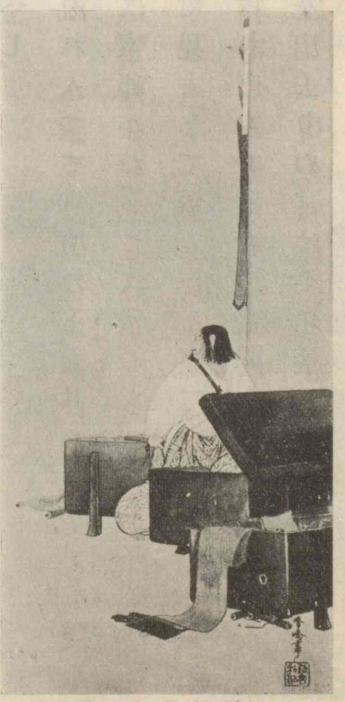
中に御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隱形
 の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されば、やがて
 突立てんと申し召して、氷の如くなる刀をぬいて御腹にさし當て
 て、兵此所にこそと言はんずる一言を待たせ給ひける御心のうち
 推量るもなほ淺かるべし。
 さる程に兵佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上までも残る所
 なく搜しけるが、餘りに索めかねて、これ體のものこそ怪しけれ。あ
 の大般若の櫃をあけて見よとて、蓋したる櫃二つを開いて御經を
 取出し、底を覗して見けれどもおはせず。蓋開きたる櫃は見るまで
 もなしとて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、
 夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、若しまた兵の立
 歸り委しく搜す事もやあらんずらんと御思案あつて、やがて前に
 兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。

(一)支那唐代の高僧、印度に入り、大部の經文を持歸り、漢文に譯した。

冥應
信心肝に銘す

案の如く兵共また佛殿に立歸り、前に蓋の開きたるを見ざりつるがおぼつかなしとて、御經を皆うち移して見けるが、からりとうち笑うて、大般若の櫃の中をよくく、搜したれば、大塔の宮はいせ給はて、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ」と戯れければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、または十六善神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙御袖を濕せり。

かくては南都邊の御隱所もかなひ難ければ、即ち般若寺を御出でありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄



(筆嶠香口谷)危脱宮塔大

(一)則村の第三子、初め護良親王の從ひ、良親王の叛に與した。義光、信濃の人。元弘三年(一一九三)吉野城の陥らうとした時、大塔宮の身代りになつた。

先達
龍樓鳳闕
華軒香車

勤修
(三)和歌山縣日高郡にもあるが、此所は兵庫縣(淡路島)津名郡由良町和歌山對岸の港

尊、赤松律師則祐、木寺相模岡本三河坊、武藏坊村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮をはじめ奉りて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長せるを先達につくり立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

この君もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しう思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮脚巾草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤おこたらせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。

(三)由良の湊を見わたせば、沖漕ぐ舟の楫緒絶え、浦の濱木綿幾重と

掛詞

(一)和歌山縣海南郡
(二)和歌山市和歌浦
(三)共に同所附近
雨を含める孤村の樹夕べを送る遠寺の鐘
(四)高郡切目村

袖を片敷く

(六)三山は本宮、新宮、那智

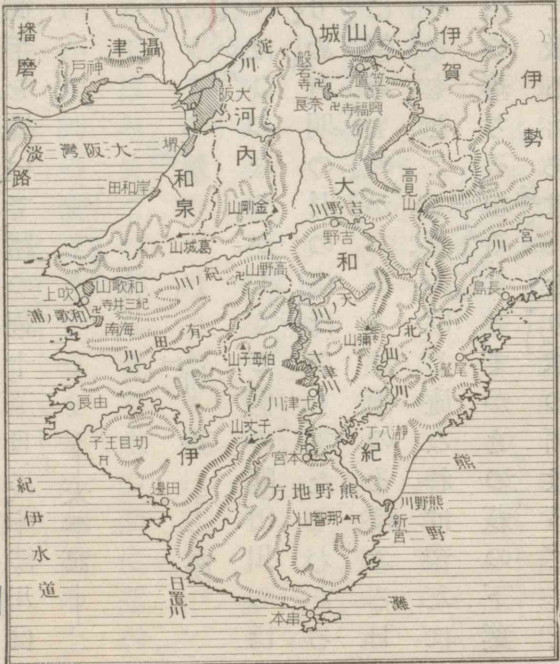
も知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と薄紫や藤代の松に懸れる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に磨ける玉津島光も今はさらでだに長汀、曲浦の旅の路心を碎く習なるに雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、哀れをもよほす時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。

その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、終夜祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に、御窮屈ありければ、御腕を曲げて枕として、暫く御目睡ありける御夢に、びんづら結ひたる童子一人來つて、熊野三山の間は、なほも人の心不和にして、大義成り難し。これより十津川の方へ御わたり候うて、時の到らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け參らせられて候へば、御道指南仕るべく候。と申すと御覽ぜられて、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、た

高峯の雲に枕をそばだつ

岩漏る水に渴を忍ぶ

かたしく思し召されければ、未明に御よろこびの奉幣をさゝげ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。その路の程三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕をそばだてて、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見あぐれば、萬仞の青壁、劍に削り見おろせば、千丈の碧潭、藍に染めり。數日の間かゝる險難を経させ給へば、御身もくたびれ果てて



流るゝ汗水の如く、御足は缺損じて草鞋皆血に染れり。御供の人々もその身鐵石にあらざれば皆饑ゑ疲れてはかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路の程十三日に、十津川にぞ著かせ給ひける。

— 太平記 —

六 石濱の雨

加藤 千蔭

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に行きて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧たちわたる曉のさまも、ところから世に似ぬものから、こゝは雨のそぼふる日なん、殊にあはれは深かりける。もとより萱ふける庵なれば音だになくて、軒のしづくの三つ四つ落ちそむるより、まがきの萩の下葉の色づきたるが、ほろ／＼と散るもあはれなり。水の面はうごくともなくて、鏡の如くなるに、雲のこきうすきうつろひて、かつ浮びか

(一) 歌人、文學者、
本姓橋、通稱
淵の門人、賀茂眞
化五年(二) 文
六八年(三) 文
七十四(四) 文
今東京市淺草
區橋場邊

強めの話
をなん、こゝろ

水脈

つ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをのひと筋はさしひく汐にもまじらて、とはにはなだの色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山のましみづの落ちくるならん。うち向ふ岸の榛原のみこき墨がきの如くなるが中に、はゝその黄ばみたるは、流石にほのかに見えて、そのひま／＼より長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢はやう／＼にうす墨もてかき消ちたらん如く、いとしも遙けきは、たゞなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。こゝかしこより鳥の飛びゆきつゝ、ねぐらの鷺のつばさおもげに起きいて、川の瀬のまこもにおりたてば、みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし。かみつ瀬より、いかだ師の蓑笠きて、さをいかだの上に横たへ、おのれたゞむきて、思ふこともなげにて居り、いかだは水のまに／＼流れ行くも静けし。渡守舟さし出せば、大笠かたむけてわたり行く人の、やがて堤をありくさま、繪によく似たり。すべて一

日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風かよひ
 来て、岸の木立も、長き堤も、あるはあらはれ、あるはかくれて、限りな
 き青海原に向ひたらんやうにおほゆるをりもありけり。かくてや
 や夕暮近くなり行けば、群鳥のおのがじしねぐら求むるに、雁の一
 つら二つらわたり行くなど、えもいはん方なし。暮れはてゝも、なほ
 逝く水の色のみとほじろくのこりて、川ぞへ小田にいはいはへる水分
 の神のみあかしの海士のいさりともいふべく、かすかに見えわた
 るもあはれなり。

秋ふけて小さめそほふる隅田川

たがすみがきのすさびなるらん

うけらが花

七 詩人西行

藤岡作太郎

天涯放浪の行脚僧

(二) 卷、西行の家集

噴々

北面の士

厭離の志

(一) 京都市伏見區に宮址がある。

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊し
 うし、鎌倉室町の世、抑、歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべ
 からず、罰を蒙るべき事なり。と言はれし時、稱讚の聲また定家に譲
 らず。近世に至つて定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一
 書は、なほいかなる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に噴々たる
 は抑、何の故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。
 代々武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に
 堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、
 左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど義
 清は榮利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機に就い
 ては、或は傳へて曰く、曾て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿よ
 り退出し、また明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に隨ひて

揚然 (一)清信士度人經の偈句

愛著の絆

(二)第七十五代崇徳天皇の御代(二八〇〇年)

(三)右兵衛佐頼朝

(四)弘法大師

桑門

悠々自適

憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死し給へり」とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は揚然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄恩入無爲は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがるを、思ひきりて縁より下に蹴落し、これこそ愛著の絆を斷つ始めぞと、顧もせて家を遁れ出て、嵯峨に至りて剃髮せりと稱す。かくて名を西行また圓位といふ。出家する時保延六年にして、西行歳正に二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に参り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見参し、進みて奥州に至り、西の方是中国より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし」と。一枚の笠、一本の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ自然を友とし、悠々自

(一)鎌倉時代の豪僧。俗名を遠藤盛遠といふ。正治元年(一一九一年)八十九歳歿。

手ぐすねを引く うはくすねを引く

言ひがひなの法師どもや



適興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺これを惡み、弟子に告げて曰く、遁世の身ならば一筋に佛道修行の外他事あるべからず。數寄を立てて此所彼所に嘯きあり、條憎き法師なり。いづこにても見

あひたらば頭を打割るべし」と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の参り會ひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。誰ぞと問へば、「西行と申す者」と言ふ。文覺手ぐすねを引き、望のかなひつる體にて、明障子をあけて出づ。暫し、まもり

て、年比承り及びたるに、御尋ね悦び入り候とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、「日比の仰に違ひたるは」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、言ひがひなの法師ども

面様

や、あれは文覺に打たれんずる者の面様か。文覺をこそ打たんずる者なれ」と言へりといふ。

西行深く月花を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせん事を思ひて、詠じて曰く、

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎのもちづきのころ

晩年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず建久元年二月十六日、七十三歳にて入滅せり。

我が國古來詩人多しと雖も、深く自然に憧れ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行のうち終へし者、前後僅かに三人。西行、宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離のをりを厭はず、私淑してその跡を追ひし者、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行、宗祇が行狀を慕ひし者とす。西行は歌道稀有の名手、宗

幽契違はず
一八五〇年

(一)連歌師、飯尾氏。花の下と號した。紀伊の人。文藝二年(一六二二)寂年八十二。私淑す

一期を劃す
風月に放浪し
雲水に吟嘯す
吟囊を肥す

跼天踳地

踏踏す

めきまします

京洛



宗祇法師(野田九浦筆)

ものなければ、随つて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、唯同

祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人。各その道に一期を劃せし三家が、何れもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯し、し事を思へば、旅行がいかにかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

抑平安時代の貴紳淑女は、賀茂、桂、二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に踏踏し、足畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝する

詞花言葉

籟却す
隱微の聲

粉本

(一)詩人、評論家、
名は昌治、
治は昌治、
五十四年(二)
湯縣に生れた新

じ詞花言葉を飾るのみにて累代繼承し行けば、和歌の思想辭句の上にもおのづから典型を生じて、天真を忘れ、實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊その内容は空しく、滔滔として風をなせる時、西行獨り蹶起して從來踏襲せる典型を籟却し、自ら山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安の末、崇徳天皇の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠ぜる事の、世上一般の題詠と選を殊にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句皆己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲噴噴として天成の大才と許さるゝも、また宜ならずや。

八 「まこと」

相馬 御風

芭蕉や良寛のやうな人たちに取つては、藝術の修行が同時に最

宗教的勤行

(一)井伊直弼のこ
と。江戸時代
の政治家。萬
根藩主。二
元(二)年(二)
〇(二)年(二)
六(二)年(二)
六(二)年(二)

も尊い宗教的勤行であつた。それは實に最も嚴肅な修道であり、最も敬虔な勤行であり、最もすなほな恭敬であつた。そして唯「寂」の一字あるのみと芭蕉も言つてゐる如く、この天地の寂味、生の寂味に徹する事が、彼等の修行の根本であつた。芭蕉が我が詠遺すところの句々皆辭世ならざるはなしと言つた覺悟も、茶湯の交會はすべてこれ「一期一會」と觀念する事を以て茶道の極意とした。井伊宗觀の心境も、皆この天地の寂味、生の寂味の味到に外ならなかつた。しかし、彼等の味到した寂味は、決して謂ふところの空觀でも、虚無見でもなかつた。それは「私」に捉はれた否定ではなかつた。それは實に萬象常住の味はひであつた。随つて彼等は謂ふところの厭世ではなくして、寧ろ本當の修行であつた。またそれは徒に自ら獨りを清うせんとするいはゆる獨善の境涯などではなくして、本當に一切を清淨にする念願からであつた。

(一) ひとり絶えたる山
里の寂しさを思
ひ絶えたる山
くば住み憂か
らまし(山家
集卷下)

(二) 西行法師。

(三) 豊臣時代の武
將、歌人名は
木下勝俊。慶
安三年(一六
一〇年)歿。
八十一。年
俳人。甲斐國
の保元兵衛は
山口官兵衛(三
十六年)歿。
七十五。年

芭蕉とか良寛とかいふ人々の生活に一貫したところは、實にこの生の寂味、天地の寂味の痛感であつた。永い年月の間の彼等の孤獨な修行は、唯偏にこの味はひに徹せんが爲の修行であつた。そして眞實にこの味はひに徹する事によつて、彼等は始めて本當の「まこと」の心を得、本當の魂の世界を得たのであつた。

「寂し(一)さなくば憂からましと西上人の詠み侍るは、寂しさをあるじなるべし。また詠める、

山里にこはまた誰をよぶこ鳥

ひとりすまんと思ひしものを

ひとり棲む程面白きはなし。長嘯隱士の曰く、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふと。素堂常にこの言葉を憐む。余もまた

うき我を寂しがらせよ閑古鳥

とは、或寺に獨居して言ひし句なり。」

(一) 芭蕉の嵯峨落
柿舎に於ける
俳諧日記。

(二) よく見れば
なづな花咲く
垣根かな(芭蕉)

かう芭蕉自ら「嵯峨日記」の中に書いたのも、さうした自らの心境を告白したものに外ならない。

しかし、前にも述べた如く、芭蕉などいふ人々が、かやうに天地の寂味に徹しようとするのは、決して一切を捨去つて空に歸せんが爲ではなかつた。寧ろその反對に、彼等はこの寂味に徹して、始めてたましひの「まこと」を得、それによつてこそ始めて眞實に一切に接し得るのである事を信じたが爲であつた。古池に飛込んだ一匹の小さな蛙の立てた水の音に、天地幽玄のひゞきを聞き得た程の芭蕉の澄切つた心の耳も、垣根に生えた一本の雜草に咲く見るかげもない春の花に、宇宙の生命の輝きを見る事を得た程の彼の澄切つた心の眼も、すべてはこの「まこと」に徹した心の賜でなくて何であらう。

「一期一會」を觀念する事によつて、井伊宗觀は茶湯の交會の眞實

の味はひを靜かに徹し味はふ事の出来る「まこと」の心を得た。幽玄な天地の寂味に徹する事によつて、芭蕉は始めて眞實に萬象の生命を慈しみ味はふ事の出来る「まこと」の靜かな心を得た。即ち彼等のこの天地の寂味、生の寂味に徹せんとした修行は、同時に萬象を攝取し得る心の「まこと」を得んとする欣求だつたのである。去來が芭蕉に正風の大意如何と尋ねた時に、芭蕉が「俳諧はよく萬物に應ずる事を旨とすべし」と答へたと云ふのも、その意に外ならぬ。若しこの場合、去來の問が俳諧道の修行如何と言ふにあつたら、恐らく彼は孤獨の勤行を以て答へたであらう。良寛に取つても芭蕉に取つても、決して孤獨その物が最後の念願ではなくして、眞の孤獨に徹する事によつて得られたたましひのほがらかさ、ひろやかさ、しづけさ、すなほさが尊かつたのである。

——愚庵和尚その他——

九 枯 野

金屏の松の古びや冬ごもり
 からびたる三井の二王や冬木立
 蒲團著て寝たるすがたや東山

芭蕉 其角
 嵐雪

應々といへ
 とたゞくや
 雪の門
 去來



去來筆蹟

蕭條として石に日の入る枯野かな
 ほたくと朝日さしこむ炬燵かな
 ながくと川一筋や雪の原
 大根引大根で道ををしへけり
 冬枯や雀のありく戸樋の中

燕村 丈草 凡兆
 一茶 太祇

(一)俳人。加賀國
 金澤の人。業と
 都で醫をた。芭
 蕉の門人。生
 歿年不詳。

(一)鎌倉時代の女流文學者の妻藤原爲相の母。安永三年(一七九四)歿。享年七十六。
 (二)今京都市左京區。東國街道から京都に入ると入口にあたる。
 (三)今滋賀縣栗太郡老上村。

掛詞

(四)同縣蒲生郡鏡山村の北にあつた古驛。
 (五)同縣野洲郡守山町野洲川の西岸にある。

一〇 十六夜日記

阿 佛 尼

栗田口といふ所より車はかへしつ。程なく逢坂の關越ゆる程に、

さだめなき命は知らぬ旅なれど

またあふ坂とたのめてぞゆく

野路といふ所は、こしかたゆくさき人も見えず。日は暮れかゝり

て、いとも悲しと思ふに、時雨さへうちそゞぐ。

うちしぐれふる里おもふ袖ぬれて

ゆくさきとほき野路のしの原

こよひは鏡といふ所に著くべしと定めつれど、暮果てて行著か

ず守山といふ所にとゞまりぬ。此所にも時雨なほ慕ひ來にけり。

いとどなほ袖ぬらせとや宿りけん

まなく時雨のもる山にしも



十六夜日記

岩田正己筆

(一) 建治三年十一月

(二) 野洲郡

(三) 同縣阪田郡

けぢめ

(四) 阪田郡の東北五キロメイトル居る高水は古

(五) 岐阜縣不破郡の藤川に仕えよる君に代へて大古今御集

今日は十六日の夜なりけりいと苦しくて臥しぬ未だ月の光は
かすかに残りたる曙に守山を出でて行くやす川渡る程先立ちて
行く旅人の駒の足の音ばかりさやかにて霧いと深し。

旅人はみなもろともに朝立ちて川霧のさかすかに

こまうちわたす野洲の川霧

十七日の夜は小野のしゆくといふ所にとままる月出でて山の
峯に立ちつゞきたる松の木の間けぢめ見えていと面白し此所は
夜深き霧のまよひにたどり出でてつさめがるといふ水夏ならばう
ち過ぎましと思ふにかちびとはなほ立寄りて汲むめり。

むすぶ手に濁る心をすぎなばさめが井の清水をすくひ上げて

とぞ覺ゆる。うき世の夢やさめが井の水

十八日美濃國關の藤川渡る程に先づ思ひつゞけける。

(一)不破郡關戸町松尾の關天武天皇の御所にあつた。置まぬた。關屋の板底は今も變らざりけり。

(二)同縣大垣市笠縫町。心より外に。

(三)三河國(愛知縣)碧海郡知立町の字。同縣寶飯郡高き三六二メの勝地。紅葉。

わが子ども君に仕へん爲ならて

不破の關屋の板底は今も變らざりけり。

ひま多き不破の關屋はこの程の

關よりかき暮しつる雨時雨に過ぎてふり暮せば、路もいと悪しくて、心より外に笠縫のうまやといふ所に、暮果てねどとままる。

たび人はみのうち拂ふゆふ暮の

雨にやどかるかさぬひの里

二十一日八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山遠きはら野を分けゆく。晝つ方になりて、紅葉いと多き山に向ひて行く。風につれなき所々、朽葉に染めかへてけり。常磐木どもも立ちまじりて、あをぢの錦を見る心地す。人に問へば宮路山といふ。

しぐれけり染むるちしほのはてはまた

もみぢの錦いろかへるまで

この山まではむかし見し心地するに、頃さへ變らねば、

待ちけりなむかしも

こえしみやち山

おなじ時雨の

めぐりあふ世を



(筆信豪野狩) 尼佛阿

して、何のたよりにかくて住むらんと見ゆ。

ぬしやたれ山の裾野に宿しめて

日は入果てて、なほ物のあやめもわかぬ程に、わたうどとかやい

(一)度津。寶飯郡。

ふ所にとゞまりぬ。

一一 長柄堤の訣別

坪内逍遙

晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬連りにいなゝいて行人出づ。はや分れ行く横雲や、残んの星を一つづゝ、鐘が消し行くいなめの長柄堤に秋たけて、一叢蘆に風黒く、有明凄き大川水逝きて歸らぬ浪の音、狭霧に咽び白け行く千草が蔭の蟲の聲、哀れはいとゞまさるらん。片桐市、正且元は、居城茨木へ立退かんと、従ふ郎等一百餘人、寅の刻に邸を立つて、大阪城を後になし、列を正して徐々と、長柄堤にさし掛る。その時市、正手綱を控へ、従兵を先へ進ませ、弟主膳正を呼び近づけ、改めて言ひけるやう、直いかに弟、我昨日討手を待受け、自殺せんず覺悟なりしに、伊豆守が残兵ぬけがけなし、討手の荒膽をひしぎし爲、備ありと見たがへしか、また寄せ來らん模様もなく、あまつさへ夜に入りては、外にありし家臣まで、變を聞きつけ馳集り、血氣のともがらこれに氣を

(一) 英文學者、劇作家、文學博士。名は雄藏。美濃國(岐阜縣)の人。昭和十七年歿。年七十七。
 (二) 長柄川は今の大阪市東淀川區を流れる新淀川の附近にあつた。
 (三) 豊臣氏の功臣。元和元年(一六二五年)大阪落城の時自殺した。
 (四) 今大阪府(攝津國)三島郡茨木町。
 (五) 石川伊豆守貞政。

命をきかばこそ

(一) 織田信雄常眞。
 (二) 豊臣秀頼。

(三) 木村長門守重成

吉左右

差配



得て、薪に油をそゞげる如く、弓、鐵砲とひしめき騒ぎ、命をきかばこそ。うちすておかば、珍事に及ばんも圖り難く、暫く彼等をなだめん爲、ひと先づ茨木へ引退き、後事を圖らんとは言ひしもの。昨夜ほのかに傳へ聞けば、織田入道も君の片見限り、俄に京表へ退きし由、お家の危機愈、迫んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に到らん事必定なり。それにつき所存あつて、先刻今村三右衛門を木村が邸へ走らせたり。おつつけ三右が吉左右あらん。我はこれにて相待つべし。御身は暫く我に代り、手勢を差配し、途中に不慮の間違なきやう、一足先へ參らるべし。と言葉のうち、遙かにしたひ駈來る足音。

主あゝの足音は確かに今村。市三右衛門か。今我が君これに御座ありしか。長門様にはおつつけこれへ。市ほゝ大儀々々。満足なるぞよ。然らば主膳は一足先へ。三右衛門も此所かまはず。我はこれにて相待つべし。主仰ては御座りますれど、油断ならざる當節がら、いかなる變事あらんも知れず、今唯御一人この所に御座あらんは心許なし。主せめて我々二人兩人は。市はて入らぬ遠慮。氣づかひ致すな。往け。主ぢやと申して。市はて往けと申すに。二人はゝあ。

顔見合せて是非なくも、主膳を先に三右衛門、心残して行過ぐる。

後には何か一思案、寂然として駒たつる、長柄堤の有明方、ねぐらにさへづる小鳥の聲川霧やうく晴行けば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋昇る朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ、ひんがしの空には似ぬや入る方の、月婁じき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し遠方に、おぼろくとあらはるゝ、名におほ阪の四

くだかけ

南山不落

(一) 豊臣秀吉

(二) 加藤肥後守清正

せめく(三)

(三) 秀吉の正室、北政所とも言ふ

脣齒亡ぶ

(四) 徳川秀忠の長女、慶長八年(一六三三年)秀頼に嫁いだ。

衢八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、

市おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れく。取分け加藤肥州逝去の後、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者は才略乏しく、阿附黨同して相せめげば、大政所の御方さへ、當家を餘所に見そなはし、浮世離れし御有様。脣齒既に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、

言ひかけて聲曇らせ、

市須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がする事なす事、いすかの嘴とくひ違ひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の道火となり、毘廬舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに康かれと、祝ひし文

(一)京都方廣寺の鐘の銘に「國家安んずるは天子の康つたので、あつたので、家康は自分を呪するものとして、言ひがけたりをもちかけた。姑息因循（良）わな良

字が原となり、降つて沸いたる難題は、唯前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたる事、御運の末と言ひながら、
こらへず馬より飛びくだり、彼方に向ひ平伏なし、
市、これ、しかしながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、空しく關東のわなに罹り、仰せ附けられし御遺命に、背き奉る今日の仕合、不忠とも言ひがひなしとも思し召さん。それを思へば某が、この腸はちぎるゝばかり。つぐのひ難き不臣の罪は、あの世でおわび仕らん。お宥しなされて下さりませ。

在すが如く兩手を突き、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、稍あつて心づき、

市、あゝ、我ながら不覺の至。我が大罪の御わびよりも、さしかゝるお家の安危。長門守にはいかにせし、心許なき事どもぢやなあ。

すかし眺むるをりこそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせず唯一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る木村長門守重成。

棟梁

(一)秀頼の母淀君

(二)名は治長。
(三)名は糺。

本市、正殿に候な。市、長門殿待ちかねしぞ。

言ふ間に駈寄るくつわづら、右手（右）にあり立ち顔見合せ、言葉はなくて坐るにも、先づ袖ぬるゝ朝露や、風颯々たる枯柳の枝、入方の月ゆらめきて、老行く秋の寂しさを、長柄堤に留むらん。

市、もはや豊臣の御社稷も、愈々末となつたるか。棟梁と頼む足下（足下）まで、佞人、讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは、某圖らぬ事よりして、端なくも御母公（母）の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間に、思ひがけぬ珍變あり、續いて足下に御討手と、昨朝承り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日頃に似氣なく、激論の末席を蹴立て、只今退座ありしとばかり、後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る、大野渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かき切らんと二たびまで、刀の柄に手は掛けしが、貴殿の日頃の教訓を、思ひ出

鼠輩

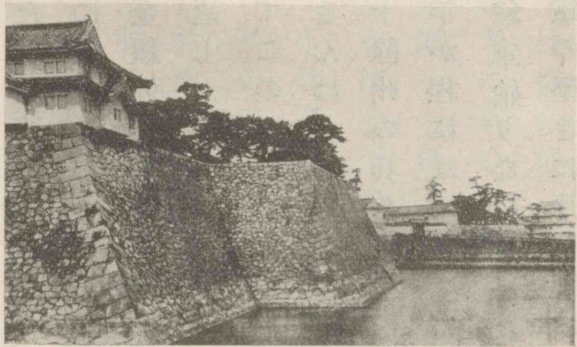
(一)和歌山縣伊都郡高野山の北谷にある町。

して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ひがひなさ。悔むを且元おし宥め、市(一)いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申せし如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿の、既に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。この上は唯偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。市(一)して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。市(一)「されば今御城に兵糧、金銀は乏しからず。まつた猛卒、勇士も事缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。市(一)してその智謀の將とは、市(一)今九度山に隠れ忍ぶ、信州上田

(一)名は昌幸。
(二)大阪落城の際戦死した、年四十六。

上使 跋扈

出丸



前の城主、眞田安房守が二男、左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ、

智勇兼備の良軍師。關原の一戦以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の様を窺ひをるを、先大年お身方となし置いたり。事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし。合戦の進退は、一切かの人に任せられよ。その他關原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ良將なるが、かねてちなみは附けおきたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳參ぜん。これ第一の手配なり。市(一)してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配は、市(一)その儀もかねて地利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木數多

伐出させ、商業の爲と偽り、紀州川の川上より、浪速津に押流させ、御船入に積みおいたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひおきたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年にわたると言ふとも、なほ支ふるに餘りあるべし。木、それに加へて故殿下が、貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、なほ若干の餘財あり。市、甲冑、兵具も乏しからず。木、城は名に負ふ南山不落。市、眞田、後藤の智勇をもて、この堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するとさきんば、木、たとひ關東の奸老雄利をくらはせ諸大名をなつけ、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、市、なか／＼三年四年が程には、攻落さん事難かるべし。木、まつた若年には候へども、愈軍始りなば、我また一方を承り、速水御宿和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の吹籬さん白旗は、祖先佐佐木が四つ目結君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石もま

(一)徳川家康。

(二)名は守久。
(三)名は正倫。
(四)名は宗是。

た透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に従ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配せん。御心安かれ市、正殿。市、ほ、たのもし、唯大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とは言ひながら往時に照し、成行く末を鑑れば、木、淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野、渡邊。市、上、御發明にわたらせらるれど、木、讒佞これを蔽ふが故、市、地の利はあれども人の和なく、木、故太閤が御威武に、戦き震ひうち伏し、六十餘州の民草も、市、天の時にや大御所のおのづからなる徳風に、いつしか靡く世の有様。木、いかなれ



(面臺舞)別訣の堤柄長

(一)家康。

はかくまで、御運傾く西天の、重有明の影薄れつゝ、木東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、重新日東天に昇るといふ、木世の成行の、二人影なるか。

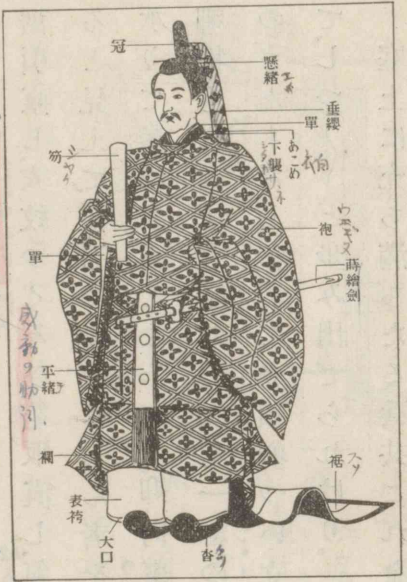
是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲夜はほのくくと明けにけり。
—— 桐一葉 ——

一二 光頼卿の参内

さる程に内裏には、同じき十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の舉動過分なりとて不参にておはしましけるが、参内して承らんとて、殊に鮮かに束帶引きつろひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傳子の桂右馬允範能に、膚に腹巻著せ、雑色の装束にいてたせ、自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れとて、御身近く

(一)平治元年(一八一九年)十一月十九日
(二)藤原頼朝の正二位権大納言に進み、大納言と言つた。承安四年(一一三四年)歿、年五十一。
(三)藤原信頼。光頼の甥。平治の亂に敗れて清盛に斬られた。年二十七。
自然の事

置き、そのほか清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて、所々門々を固く守護しけるを事ともせず、先高らかに追はせて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。



紫宸殿の後を経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座にぞ著かれたる。光頼卿は不思議の事かな。人はいかにふるまふとも、彼は右衛門督

著くまじきものをと思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそ世にしどけなう見え候へ」と色代して、しづくと歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。光頼

(一)藤原頼朝の子。從二位權中納言となつた。末座の宰相しどけなし

氣色す

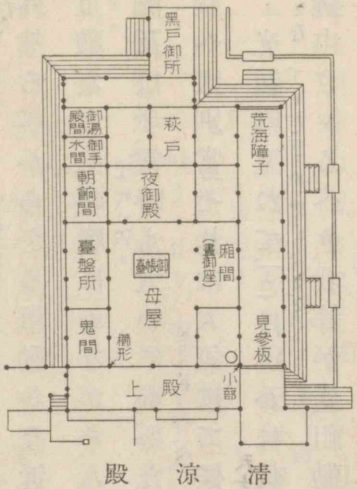
卿は信頼卿の爲には母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上すそに懸かけられて、伏目ふしめになりて色いろを失はれければ、著座の公卿あなさましと見給ふに、光頼卿下襲したかきの裾引直し衣紋えもんつくろひ、笏取直し、氣色きしきして、今日は衛府督ゑふとくが一座いざすると見えて候。召に參ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承りて參内するところなり。抑、何事の御詫ごわぞと問ひけれども、信頼卿物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議きんぎのさたもなし。程經て光頼卿つい立ちて、惡しう參つて候ひけり。とて、しづくと歩み出でられけり。

出仕す

庭上に充ち満ちたる兵共、これを見奉りて、あはれこの殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさざりつるに、し出したる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれこの

壁に耳天に口

(一)藤原惟方。檢非違使別當。



人を大將として合戦せば、いかばかりかたのもしからんと申せば、傍なる者の昔頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。と言へば、また傍よりなぞ、その頼信をうち返して信頼と付き給ふ。右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ。と言へば、壁に耳天に口といふ事あり。怖し、と聞かじと言ひながら、皆忍笑に笑ひけり。

光頼卿かやうにふるまひ給へども、急ぎても出でられず。殿上の小じとみの前、見參の板高らかに踏鳴して立たれたりけるが、荒海障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間參じたれども、承り定めたる

有職

(一)藤原通憲入道
信西
(二)今京都市左京
區吉田山

先蹤

天氣

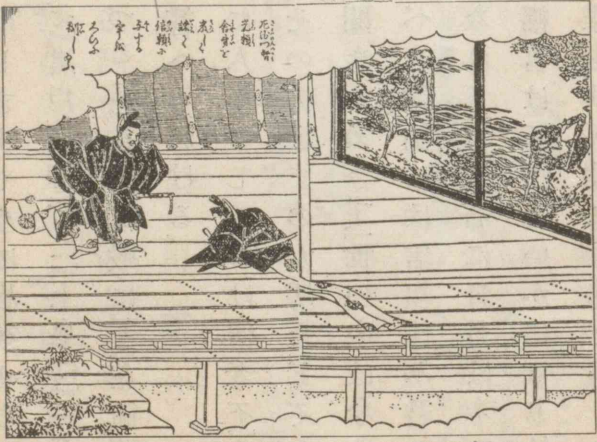
曩祖
(三)勸修寺内大臣
高藤
(四)三條右大臣定
方高藤の子

事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職然るべき人共なり。その中に入らん事甚だ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乗つて少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向はれける事は、いかに以ての外然るべからざる舉動かな。近衛大將、檢非違使、別當は他に異なる重職なり。その職にゐながら、人の車の尻に乗り給ふ事、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならずと宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかばとて、赤面せられけり。
光頼卿重ねて、「こはいかに救誕なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣が延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代、承り行ふ事は皆これ徳政なり、一度も悪事に從はず。當家はさせる英雄にはあらず、れども、偏に有道の臣に伴なつて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔よ

さしもどかる

時刻をや廻らすべき
灰燼の地となる

り今に至るまで、人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴悪の臣に語らはれて、累家の佳名を失はん事、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉紀伊國伊賀伊勢の家人等待受けて、大勢にてあなり。信頼卿が語らふところの兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若しまた火などを懸けなば、君もいかでか安穩にわたらせ給ふべき。灰燼の地となりたらん、だにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にある。



(繪挿物語物治平版古) む戒を方惟卿頼光

相構へて

(一)第七十八代二條天皇
(二)後白河上皇

べきををや。右衛門督は御邊に大小事を申し合すところ聞ゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上はいづこにおはしますぞ。黒戸の御所に。上皇は「一本、御書所に。内侍所は。温明殿に。劍璽はいづこに。夜の御殿に。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

かげろふ

かくござんなれ

にのろくしげ

また朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ」と宣へば、「それには右衛門督住み候へば、その方さまの女房などぞかげろひ候らん」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今かくござんなれ。主上のわたらせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し參らせたり。未代なれども流石に日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をいかに守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝には未だかくの如き先蹤を聞かず、前代未聞の不思議かな」とて、のろくしげに憚

宿業

(一)文學者、文學博士、成行、慶應三年(二五二)生れた。江戸に直越とも言ふ。大阪府(河内)から生駒山郡(河内)越えて奈良村(河内)に生駒郡(河内)美長、鳥見の(三)大和國鳥見の(四)會長、美長、鳥見の(五)憤懣

るところなく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、且は悲しくて、我いかなる宿業によつて、かゝる世に生れあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を見聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ」とて、袍の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、うち萎れてぞ出て給ひける。

一三 神武天皇と後醍醐天皇

幸田露伴

申すもいと畏けれど、我が國創業の御門神武天皇、孔舎衛坂の戦に御兄君五瀬命を敵の矢の爲に失ひ給ひて、甚だしく御憤懣あらせられ、誓つて長髓彦に天誅を加へんとし給ひし御時は、いかに勇猛壯烈に大御心の思し給ひしが、まゝを御製に述べ給ひしぞや。

みつ／＼し 久米の子等が
 栗生には かみら一もと
 そねがもと そねめつなぎて
 撃ちてしやまん
 と謠ひ給ひまた



(筆邦雅本橋) 皇天武神

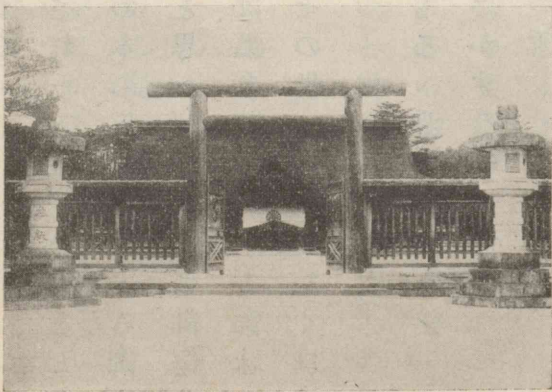
撃ちてしやまん
 と謠ひ給へる御威勢の激しき御心の猛々しき。薑を食へば餘味こ

みつ／＼し
 來目の子等が
 垣本に
 植ゑしはじかみ
 口ひゞく
 我はわすれじ

ここにありて、我が口こゝに疼む。我が兄既に撃たれぬ。我が心なほ痛む。忘れんや、おのれ醜虜、撃ち屠らてはいかてか止まん」と、御目に觸れし薑に御情を寄せ給ひて、御言葉のあやをなし出で給へる、いさぎよしなんと申すも畏き御製なり。

建武中興の御門後醍醐天皇は、これはた申すも畏けれど、英明にわたらせ給ひし御門なり。されどその御製の御心御姿は、世の異なるが爲もあるべけれど、いたく神武天皇のとは様異なり。

秋ごとのならひとおもひし露しぐれ
 ことしは袖の上にぞありける



宮 神 原 樞

と詠じ給へる、

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨

おとを聞くにもぬる、袖かな



後醍醐天皇

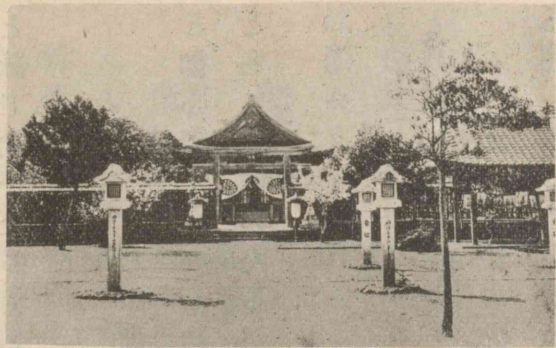
とあそばされたる、臣子の分として
は、我が日の本の天皇のかゝる御詠
ありしかと思へば、恐ながら御傷は
しさに涙はふり落ち、かゝる御詠の
ありたるその世いと恨めしく口惜
し。

うづもる、身をば

なげかずなべて世の

くもるぞつらきけさのはつ雪

の御製は、大御心の深く廣き、愚かなる身にも大凡は推量り奉られ



吉野神宮

て、これまた涙止めあへず。

身にかへて思ふと

だにも知らせばや

民の心の治めがたさを

の御製は、聖意いと畏く、恐多き極みの御

詠なり。

もの思はて過ぎ

ぬるかたのとし月は

いかに寝し夜の

夢にかあるらん

と懐舊の情を詠み給ひたる、吉野の行宮にていかなるをりにか、

あだに散る花をおもひの種として

この世にとめぬこゝろなりけり

つひの御やど
最後の御宿。
(-)後醍醐天皇の
御陵。塔尾陵
と稱する。如意
輪寺の近傍。

(-)第九十七代。



雲居櫻

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に「雲居の櫻」と稱する櫻あり。雲居は禁中を言ふ。さらでだに舊禁中のこひしくして堪へ給はざるに、吉野山中「雲居」と稱する櫻を御覽じては、豈叡感無量ならざるを得んや。悲しいかな、かりそめの御やどりつひの御やどりとなりて、延元(-)陵畔、永へに游人をして涙襟を潤ほさしむ。

吉野山花も時

得て咲きにけり

みやこのつとに

今やかざさん

土産にして京都に還らせ給ひし時の御嬉しさはさぞと思はる

花に云々
花となじみに
なつた春はど
れ程であらう
か。もはや長
をい問此所に
迎へた。春

(-)後村上天皇の
女御。

れど、やがてまた京都を保ち給ふ事能はずして、再び吉野に赴かせ給ひし時の御失望やいかなりけん。

わが宿と頼まずながら吉野山

花に馴れぬる春もいくとせ

これ長慶天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひけん。父祖の御遺志を嗣ぎ給はんの御志切なれども、事終に御志とかなはざりき。されど知らず、京都は果して御心にかなひたる御宿なりしか。この天皇の御母を嘉喜門院と申しまつる。その御歌に、

櫻花さきて疾く散るならひこそ

わが身の春のものおもひなれ

昨日は紅顔、今日は白頭、人生の老いやすきは、男子とても悲歎に堪へざるに、まして女性(にょしやう)の御身、櫻花の散りやすき様を見給ひて、いかに御身をはかなく思し給ひけん。

雅懷
風流な心持。

二〇三七年。

そのかみ
その當時の意。
此所では後村
上天皇御在世
中のこと。

故里はこひしくとてもみ吉野の
はなのさかりをいかゞ見すてん
これ新葉集の撰者なる宗良親王の御歌なり。詩人の雅懷を見
る。されど散らばまたいかに都のこひしかるらん。
嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給へ
り。されど後村上天皇崩御の後は、悲哀に堪へず、誓つて琵琶を弾
き給はざりき。然るに天授三年七月七日、吉野の行宮にて樂を張
り給ひけるが、樂終りて後、長慶天皇、門院に向ひて一曲をと切に
乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、琵琶を弾き給ふ。
その時の御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの

秋おもほゆる峯のまつかぜ

昔は父天皇この琵琶を聽きて御心を慰め給ひけん。父天皇今

御返し

御返歌のこと。
普通歌には返
しと言ひ、文
には返りと
言ふ。

君
第九十八代長
慶天皇

ふきたえぬべ
き
吹絶えてしま
ひさうな。

唱和
互に詩や歌で
問答すること。

(一)作文の方法を
述べた書。

はおはせず、母君の琵琶が亡き父天皇の形見なり。門院の御返し
に、

あはれとも君ぞ聽きける今ははや

ふきたえぬべき峯のまつかぜ

「わが餘命いくばくもなし。君が昔をしのぶといふ琵琶の音も、や
がて聽き給ふに由なかるべし」となり。

二首何れも意哀れにして、詞も妙なり。宗良親王これを評して、
古への敕撰集中の唱和に比して、毫も遜色なしとて、これを新葉
集に收め給へり。

(一) 作文五十講

(一) 歌人。明治二十年(一九二五年)生れた。市四十九年(一九二五年)生れた。

(二) 歌人。衆議院議員。明治四十七年(一九一二年)生れた。千葉縣四十

(三) 歌人。醫學博士。明治四十四年(一九一九年)生れた。山形縣四十五

(四) 歌人、書家、文藝博士、東京高等師範學校教授。明治三十九年(一九一四年)生れた。岡山縣三十五

(五) 歌人、文學博士。帝國文學學會員。明治三十五年(一九一〇年)生れた。三重縣三十五

(一) 尾山篤二郎

(二) 吉植庄亮

(三) 齋藤茂吉

(四) 尾上八郎

(五) 佐佐木信綱

この秋をふたゝびたくや蚊いぶしのしみんと眼にし
みにけるかな

紫蘇の花咲けりともわが思はぬに土にこぼるゝむらさ
きの花

静かなるたうげを登りこし時に月のひかりは八谷をて
らす

しづやかに月は照りたりあめつちの心とこしへ動かぬ
がごと

ゆく秋のやまとのくにの薬師寺の塔のうへなるひとひ
らの雲

晝すぎてなほ下露のかわかざる落葉のなかのりんだう
の花

大槻の冬木の枝のこまかきをすきては見ゆるゆふやけ
の雲

父と母ならびいまして静けさよ七十路越えてふたはし
らなほも

(一) 歌人。明治二十五年(一九〇〇年)生れた。群馬縣五十四年(一九一九年)生れた。

(二) 歌人。明治三十七年(一九〇二年)生れた。長野縣五十四年(一九一九年)生れた。

(三) 詩人、歌人。明治十八年(一九〇三年)生れた。福岡縣五十四年(一九一九年)生れた。

(一)國文學者。奈良女子高等師範學校教授。師
富山縣の人。二
明治十年(一
五三七年)生。
肺肝を吐露す
る

一五 古典の研究

(一) 岩城準太郎

「ひとり燈火のもとに書をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよなう慰むわざなれ」とは「徒然草」の名文句であるが、人間と人間とが、相互に肺肝を吐露して眞實に諒解するのは、言語文章の媒介によるのである。まだ見ぬ世界の人と魂相通ずるを得るのは、即ちふみのお蔭である。國と國と相知り、國民と國民とが相理解するのは、外交と貿易とによるばかりではない。相互に他の文學を読む事による。矯飾と辭令とを剝去つた赤裸の國民は、その創作するところの文學に最もよく活動するからである。

一國の國民がその祖先と相面接する思をするのは、過去の國民の書遺した文學を読む時である。父祖の遺文に接する時の懐かしさは言ふまでもない。江戸時代の國民、鎌倉室町時代の國民、平安時

宿縁

代の國民、更に遡つて上古、太古の國民の、その時代々々に創作した文學を繙く時こそ、本當に我が血脈の生々相繋がる宿縁を直感するのである。

古代國民の面影を髣髴しようとするには、直接古代國民の創作した物に當らねばならぬ。その思想を知り、その感情を解し、その生活に直面しようとするには、一意その遺作遺文を味讀するに限る。我が國民の固有せる生活の眞相を、生きくゝと今日の我等に見せてくれるのは、即ち古典である。古文學である。

歲月の久しきに隨つて遺文遺作が亡びる。時代の古きに隨つて文筆の人が少い。歴史あつて以來三千年、上世に遡れば、遡る程、典籍が稀になるのである。この稀に存する古文學こそ、本當に貴重な古代の鏡である。祖先の面影を窺ふべき大切なフィルムである。これを書遺した上世の文學者は、數多いその代の國民から、特に選り上げ

味讀する

られた極めて少數の代辯者であつて、風雨千歳の淘汰を経て今日に傳はつた古典は、眞に天佑によつて生命を全うした稀代の珍寶である。

かう見て來ると、古典の研究はたゞに古物いぢりの物好でないばかりでなく、學問の爲の學問といふやうなものでもない。必要だの不必要だのといふ理窟の問題でもない。實に我等の衷心の要求から、已むに已まれぬ感情の問題である。如上の意味に於て、自分は古典に對して限りない愛敬を捧げ、探究の念を起すのである。この點に著目し、かくの如き見解から古典の研究を開始した者は、即ち我が國學者であつて、これ等の人々の忠實熱心な研究によつて、從來暗がりの中に放置されてゐた古典が漸次に究明され、我が懐かしい同胞國民の面影を、まのあたり見るやうに感ずる事が出来るやうになつた。今まではせつかくあの貴重な古典をもつ

てゐながら、言語解釋の困難であるが爲に、祖先の心胸に觸れる事が出来なかつたが、これ等國學者は、先づ言語を討究し、傳説を説明し、歌謠を解釋し、史籍、物語等古典の全部にわたつて啓蒙的研鑽に力めたので、我等後生がどのくらゐその餘澤に浴してゐるか計られない。我等は國學者の開いてくれた道に立つて、遠い祖先への面接に急ぐ時、しみじみ有難さを感じて、その功業を讚美しないではゐられない。

—國文學の諸相—

一六 小野の御室

昔(一)惟喬親王(二)と申す皇子おはしましけり。山崎(三)のあなた(四)に水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、その宮へなんおはしましける。その時右の馬の頭なりける人を常(五)にゐておはしましけり。狩は懇(六)にもせて、大和歌にかゝれりけり。今狩する交野(七)の渚(八)の院(九)

(一)第五十五代文德天皇の第一皇子。小野宮と申す。
(二)京都府乙訓郡の南陽、大山崎村の地名。
(三)在原業平。
(四)今の大阪府河内國北河内郡殿山町にあつた。

の櫻殊に面白し。その木の下におりゐて、枝を折りてかざしにさして、皆歌詠みけり。馬の頭なりける人の詠める、
よの中にたえて櫻のなかりせば
春のこゝろはのどけからまし

また人の歌、

散ればこそいと櫻はめでたけれ
うき世になにか久しかるべき

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで物語して、さてあるじの皇子入りて、大殿ごもり給ひなむとす。十一日の月も隠れなんとすれば、かの馬の頭の詠める、

あかなくはまだきも月のかくるゝか
山の端にげて入れずもあらなん

大殿ごもる
貴人の詠

さてもさぶら
ひてしがな



小野の雪 (吉村忠夫筆)

給ひて、小野といふ所に住み給ひけり。正月に拜み奉らんとて詣でたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室に詣で、拜み奉るに、つれづれといともの悲しくておはしましければ、稍久しくさぶらひて、いにしへの事など思ひ出でて聞えさせけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもありければ、えさぶらはで、夕暮に歸るとて、
忘れては夢か
とぞ思ふ思ひきや

伊勢物語

(一)鎌倉時代の歌
都の人(文政)建
四年(一八七
六年)六十八
歳で歿したと
言はれる。四七

うたかた

棟を並べいら
かを争ふ

一七 方丈記 その一

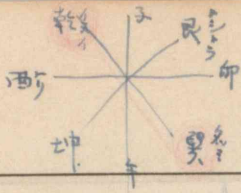
鴨 長明

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮
ぶうたかたは、且消え、且結びて、久しくとどまる事なし。世の中にあ
る人と住家と、またかくの如し。
玉敷の都のうち、に棟を並べいらかを争へる、たかき、いやしき人
のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋
ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて、今年は作り、あるは
大家亡びて、小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず、人も多か
れど、古へ見し人は、二三十人がうちに僅かに一人二人なり。あした
に死し、ゆふべに生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。
知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りて、いづ方へか去る。また知

無常を争ひ去
る

有るものには
争ひあはれぬ

(一)第八十代高倉
天皇の御代
(二八三七年)



らず、假のやどり誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむ
る。そのあるじと住家と無常を争ひ去る様、言はゞ朝顔の露に異な
らず。あるは露落ちて花残り、残ると雖も朝日に枯れぬ。あるは花
は凋みて露なほ消えず、消えずと雖もゆふべを待つ事なし。
凡そ物の心を知れりしよりこの方、四十餘りの春秋を送れる間
に、世の不思議を見ること、稍たびくになりぬ。

安元の大火

去にし安元三年四月二十八日かよ、風烈しく吹きて、靜かなら
ざりし夜、戌の時ばかり都の巽より火出て來て、乾に至る。果てには
朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜が程に塵灰となり
にき。火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出て來け
るとなん。吹迷ふ風にとかく移り行く程に、扇を廣げたるが如く末
廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰を地に吹



(筆涯龍藤伊) 火大の元安

きついたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焰飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心あらんや。あるは煙に咽びて倒れ伏し、あるは焰にまぐれて忽ちに死にぬ。あるはまた纒かに身一つからくして遁れたれども、資財を取らざるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりき。そのつひえいくそばくぞ。このたび公卿の家十六焼けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人の營皆おろかなるうちに、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し心を惱ます

(一) 第八十一代安徳天皇の御代
(二) 八四〇年

けた桁

地獄の業風

事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

治承の辻風

また治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極の程より大きな辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きける事侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、そのうちに籠れる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり。けた、柱ばかり残れるもあり。また門の上を吹放ちて、四五町が程に置き、また垣を吹拂ひて、隣と一つになせり。況や家の内の寶數を盡して空にあがり、檜皮、ふき板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るが如し。塵を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りとよむ音に、物言ふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。

都うつり

(一)福原遷都。

(二)第五十二代。

(三)安徳天皇。

また同じ年の六月の頃、俄に都^(一)うつり侍りき。いと思の外なりし事なり。おほかたこの京の初を聞けば、嗟^(二)峨天皇の御時都と奠まりにけるより後、既に數百歳を経たり。ことなる故なくて、たやすく改るべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂へあへる様、ことわりにも過ぎたり。されど、とかく言ふかひなくて、御門^(三)よりはじめ奉りて、大臣、公卿悉く移り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰かひとり故郷に残り居らん。官位に思をかけ、主君の蔭を頼む程の人は、ひとり日なりとも疾く移らんとはげみあへり。時を失ひ、世にあまされて期するところなき者は、愁へながら留りゐたり。

軒を争ひし人のすまひ、日を経つゝ荒行く。家はこぼたれて淀川に浮び、地は目の前に畑となる。人の心皆改りて、唯馬鞍をのみ重くす。牛車^(四)を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。



伊藤龍涯畫

都 三 つ り

木の丸殿

ありとしある人

浮雲の思

都の手ぶり

瑞相

その時おのづから事の便りありて、津の國今の京に至れり。所の有様を見るに、その地程せばくて、條里を割るに足らず。北は山に沿ひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音常にかまびすしくて、潮風殊に烈しく、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なかなかやうかはりて、優なる方も侍りき。日々に壞ちて、川もせきあへず運び下す家は、いづくに作れるにかあらん、なほ空しき地は多く、作れる屋は少し。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人、皆浮雲の思をなせり。もとよりこの所にゐたる者は、地を失ひて憂へ、今移り住む人は、土木のわづらひある事を歎く。路のほとりを見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都の手ぶり忽ちに改りて、たゞひなびたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるものも、しるく、日を経つゝ世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の憂遂に空しからざりければ、同じ年

(一)堯帝。
(二)第十六代仁德天皇。

の冬、なほこの京に歸り給ひにき。されど壞ちわたせりし家どもは、
いかになりにけるにか、悉くもとのやうにも作らず。
ほのかに傳へ聞くに、古への賢き御代には、憐みをもて國を治め
給ふ。即ち御殿に茅をふきて、軒をだにとゝのへず、煙の乏しきを見
給ふ時は、限りある貢物をさへ免されき。これは民を恵み、世をたす
け給ふによりてなり。今の世の中の有様、昔になぞらへて知りぬべ
し。

養和の飢饉

(三)安徳天皇の御
代。(一八四一
年)

また養和の頃かとよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年が間飢
渴して、あさましき事侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大
水など、よからぬ事どもうち續きて、五穀悉く實のらず、空しく春耕
し、夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。
これによりて國々の民、あるは地を捨てて境を出て、あるは家を

ぞめき

なべてならぬ
法

さのみやはみ
さをもつくり
あへん

あまさへ

忘れて山に住む様々の御祈始りて、なべてならぬ法ども行はるれ
ども、更にそのしるしなし。京のならひ、何わざにつけても、源は田舎
をこそ頼めるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやはみさをもつ
くりあへん、念じわびつゝ、様々の寶物かたはしより捨つるが如く
すれども、更に目見たつる人もなし。たまゝかふる者は金を軽く
し、粟を重くす。乞食路のべに多く、憂へ悲しむ聲耳に滿てり。
さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あくる年は立直るべき
かと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさるやうに跡形なし。

一八 方丈記 その二

わづらひ

すべて世にありにくき事、我が身と住家とのほかなくあだなる
様かくの如し。況や所により身の程に隨ひて心を悩ます事、擧げて

數ふべからず。

若しおのづから身かなはずして權門の傍にをる者は、深く悦ぶ事はあれども、大いに樂しぶにあたはず。歎ある時も、聲を揚げて泣く事なし。進退安からず、起居につけて恐れをのゝく。例へば、雀の鷹の巢に近づけるが如し。若し貧しくして富める家の隣にをる者は、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつゝ、出で入る。妻子僮僕の羨める様を見るにも、富める家の人のないがしろなる氣色を聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。若しせば、地にをれば、近く炎上する時、その害を遁るゝ事なし。若し邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれ難し。勢ある者は貪慾深く、ひとり身なる者は人に輕しめらる。實あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人を頼めば、身他のやつことなり、人をはごくめば、心恩愛につかはる。世に従へば、身苦し。また従はねばくるへるに似たり。何れの所を占め、

すぼし
心念々に動く

たまゆら

いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を慰むべき。

(一)「住みわびて
我さへ軒の忍
草しのぶかた
がたしげき宿
かな(金葉集
周防内侍)

我が身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後縁かけ身衰へて、忍ぶ方々しげかりしかば、終に跡とむる事を得ずして、三十餘りにして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありしすまひにならずらふるに、十分が一なり。唯居屋ばかりを構へて、はかばかしくは屋を造るに及ばず。僅かに築地をつけりと雖も、門たつるにたづきなし。竹を柱として、車宿りとせり。雪降り風吹く毎に危からずしも、あらず。所は河原近ければ、水の難深く、白波のおそれも騒がし。

たづき

(二)第八十四代順
徳天皇の承久
一八七九年
の頃

すべてあらぬ世を念じ、すぐしつゝ、心を惱ませることは、三十餘年なり。そのあひだをりくゝのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十の春を迎へて、家を出で、世に背けり。もとより

よすが
(一)一名小鹽山。今京都府山城國乙訓郡にある。京都の西南。

(二)亦猶_ホ行人之造_リ旅_ヲ宿_{マシ}老蠶之成_ス中_ニ獨_リ滿_ラ乎_カ。其住幾時_ハ風_ノ池_ノ亭_ノ記_ナ

妻子なければ捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめん。空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をか經ぬる。

閑居

此所に六十の露消え方に及びて、更に末葉の宿りを結べる事あり。言はゞ旅人^(一)の一夜の宿りを造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に齡は年々に傾き、住家はをりくゝにせばし。その家の有様世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、うちおほひをふきて、つぎめごとにかねがねをかけた。若し心に適はぬ事あらば、易く外に移さんが爲なり。その改め造る時、いくばくの煩がある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途い

(一)京都市伏見區醍醐木幡山の東北。

(二)六卷。源信僧都の著。源信は俗姓卜部。仁元年(一六七七年)寂。年六十七。

ほどろ
つかなみ

らず。

今、日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を造り、内には西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置しまつり。落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。即ち和歌、管絃、往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏、繼琵琶、これなり。東に沿へてわらびのほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、此所に文机を出せり。枕の方に炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろゝの藥草を植ゑたり。假の庵の有様かくの如し。

その所の様を言はゞ、南にかけひあり、岩を疊みて水を溜めたり。

觀念の便り

口業を修む
(一)京都府宇治郡宇治村宇治川の東岸
(二)沙彌滿誓、第四十四代元正天皇(一三三八年)の御代の人
(三)潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟、白樂天、琵琶行
(四)桂大納言源經信、琵琶の名手、嘉保元年(一七五四年)太宰權帥に貶せられた
(五)共に琵琶の名曲

林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山と言ふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり。觀念の便りなきにしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして、西の方に匂ふ。夏は杜鵑を聞く、語らふ毎に死出の山路を契る。秋はひぐらしの聲耳に満てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、積り消ゆる様罪障に喩へつべし。若し念佛物憂く、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとりをれば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らん。若し跡の白波に身を寄するあしたには、岡の屋に行交ふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、若し桂の風葉を鳴す夕べには、潯陽の江を想ひやりて、源都督の流をならふ。若し餘りの興あれば、しばしば松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれど

あからさま

がうな

も、人の耳を喜ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

おほかたこの所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今



既に五とせを経たり。假の庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事の便りに都の様を聞長けば、この山に籠りゐて後、やんごとなき人の隠れ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たびの炎上に亡びたる家ま

たいくそばくぞ。唯假の庵のみ、のどけくしておそれなし。

程せばしと雖も夜臥す床あり、晝る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。み

さごは荒磯にをる。即ち人を恐るゝが故なり。我またかくの如し。身を知り世を知れゝば、願はずまじらはず、唯靜かなるを望とし、愁なきを樂しみとす。

それ三界は唯心一つなり。心若し安からずば、牛馬、七珍も由なく、宮殿、樓閣も望なし。今寂しきすまひ一間の庵、自らこれを愛す。おのづから都に出てては、乞食となれる事を恥づと雖も、歸りて此所にをる時は、他の俗塵に著する事をあはれぶ。若し人この言へる事を疑はゞ、魚鳥の有様を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさたらん。

自修文

文章の出来ぬ時

幸田露伴

文章を作る時に、作らうといふ意志もあり、書くべき事もある

藝術的の良心
此所ではその
文章を立派な
藝術に作り上
げたいと思ふ
氣持。
世間的な名譽
心
立派な文章を
作つて世間か
ら褒められよ
うとする氣持。
念慮
おもんばかり。

に係らず、どうしても出来ぬ時がある。それが、何か病氣の爲に頭が痛むとか、或事情の爲に思想が混亂するとかいふのなら、病氣の恢復、思想の沈靜する時期を待ち、自然にその不良原因の去るのを期するよりし方がない。しかし、さういふ事情でなく、身體も四圍の事情もすべて健全無事である時に、どうしても文章の出来ない事があるものである。それには種々の場合があるが、その時にはどうしたらよいか。

文章の出来ない時にも種々あるが、先づ第一に、藝術的の良心が餘り強盛に過ぎる時、また世間的の名譽心の強烈な時には、どうしても文は出来ないものである。筆を手にして紙に向つた時、拔群の巧妙なものを作らうと期待して、その念慮が餘り強烈な時には、我が心がそれに束縛されてしまつて、自由自在に筆を運ばせる事が出来なくなる。譬へば、平素から學業の好成绩な子供が、多數の人の前に引出されて、何か試験でもされる時に、その子

興奮
たかぶること。

供の名譽心が餘り興奮して、澤山の人に賞讃されようとする時には、いはゆるしやちごはくなつて、却つて平素の成績よりも劣等なものとなるやうなものである。かういふ例は、作文家には常に有勝の事である。かゝる場合には、度胸を据ゑなければならぬ。獨り文章ばかりではない、世間の何事でも、名譽心の強烈といふ時期を通過しなければ、決して眞の進歩をするものではない。故にかゝる目に遇つた時に、これを氣に懸けて心配する必要は少しもない。つまり、手を懸崖に放すといふ心持で、高い所からぼんと一つ飛んでみるといふ料簡になると、すぐ書けるものである。何とかして人を驚かすやうな旨い文を作つてみようとする、どうしても書けない旨くても拙くても、これぎりだといふ調子でやつてみると、存外面白く書けるものである。

次に、道具を見失つてしまふと出來ない。道具を見失ふと言ふのは、譬へば、何か物を切らうとする時に切る道具がなかつたり、

てこ(挺子)
重い物を動かす
に用ひる
力に一點を
加へて
力に抗せ用
めると言ふ
桿とも言ふ
横しす他

縫はうとする時に針がなかつたり、糸がなかつたりする。これと同じく、文を書くにも道具がないと書けない。ちよつと古人の言つた好い語を得て、それから書出さうとしたり、適當な詩歌を引用して、文の飾りや飾にしようとする時などに、それが思ひ出せない、と書きにくいものである。これには平素の心掛が肝要である。いざ文を書くといふ時、または書いてをる最中に、急に探索するといふのは無理である。材料はとにかく、道具は平常から用ひ馴れて、使ひよくなつてゐなければならぬ。全くこれは平素の心掛次第である。さて、この道具が見つからない爲に、筆が滯つて困るやうな氣がしたならば、これを用ひないで文を作るといふ決心をしなければならぬ。てこは道具の一つであるが、棍棒なら何でもてこになる。てこがあれば、重い物も動かせる。今、重い物を動かさうとする場合に、何か適當な道具が見つかつたなら、これをてことして、重い物を動かさうとする。丁度そのやうな場合に、急

斷念
あきらめること。思ひきること。

需要
いりよう。とめ。必要。

にてここに適當な物が搜せるときまつたわけのものではない。こんな心の起るのは、自己の無理な注文であると斷念して、それに頼らずに、文を作り上げてしまはなければならぬ。昔から、かゝる場合の需要を充す爲に、種々様々の書物が出來てをるが、かゝる物は餘り役に立つものではない。少くとも自分だけは、未だ曾てこの種類の物から恩恵を享受した記憶はない。

次にまた、文を書いてをる最中に行詰る事がある。どんな家でも、どこまでも眞直にずん／＼奥まで行けるものでないやうに、文章も或點に到達すると行詰つてしまつて、右にも左にも行かれぬやうな場合がある。恰も拔道のない路次にはいつたやうなものである。更に譬へてみれば、谷川の流が右曲左折してをる、その曲目の所にいつも景色のよい所が多くあるやうに、文章も行詰つてしまつて一句も出ない場合、更に進む所に、その文の一番の妙味のある所が出來るのである。一度行詰つてしまつたなら、

轉換
うつしかへること。

彈劾文
罪過をあげき出す文。

檄文
宣傳の文書。

局面
ばんめん。轉じて一般に物事のなりゆきの状態。

どうしても方向を一度何れへか轉換する必要がある。しかし、その時どつちへ行つてよいかわからぬ事がある。例へば、彈劾文や檄文を書くとすれば、何事も一通り述べてしまつた後は、ばつたり行當つてしまふ事になる。全く實に困る事がある。その時、「しかし」と言つて、一應假設的に敵方に同情するやうな書き方をして置いて、更にこれを打破るやうな書き方をする。恰も一度行詰つた谷川が、更に方向を轉じて流下するやうなものである。古人の名文の中には、かゝる趣を帯びてをるものが多い。碁でも將棋でも、一度行詰つてしまつて、更に局面を展開する所に妙味があるのである。若し文を作る最中行詰るやうな事があつたならば、此所が文の妙味の生ずる所だと考へて、一奮發しなければならぬ。

以上の外、文章が出來ない場合は、いくらもあるが、要するに、さういふ場合に出逢ふたび毎に、それが自分の一進境であつて、新しい伎倆を得るに至るのだと思はなければならぬ。少しも曲折

のない河流は、その風景が頗る平凡であるやうに、未だ曾て文が
出來ないといふ目に逢つた事のない人の文章は、必ず平凡な文
である。偉人が成功するまでには、必ず曲折や波瀾が伴なつてを
るやうに、いつもすらくと書ける人の文章は、必ず平凡である。
文が出來ないといふ種々の場合を切抜けて進んで、始めて眞の
文章家となれるものである。

一九 安宅その一

ワキ詞かやうに候者は、加賀の國富樫の何某にて候。さても頼朝義
經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作り山伏となつ
て、奥へ御下向の由頼朝聞し召し及ばれ、國々に新關を立てて、山伏
を固く選み申せとの御事にて候。さる間、この所をば某承つて、山伏
を留め申し候。今日も固く申しつけばやと存じ候。いかに誰かある、

子シテ 辨慶
ツレ方 義經
狂言 同行 山伏
狂言 富強 力
ワキ 富強 力
の 從者 富強 力
石川縣 加賀
國名 石川 郡
地名 石川 郡
富樫 左衛門 泰
家

(一) 義盛
(二) 清重
(三) 八郎 弘常
(四) 十郎 兼房
(五) 海章
(六) 文治三年
(七) これやこの
別れも歸るも
も知れぬも
坂の關に後撰
集、蟬丸
(八) 山かくす春
の霞ぞ恨めし
きいづれ都の
境なるらん
(九) 古今集、おと
(十) 滋賀縣 高島郡
(十一) 矢田の野に
浅茅色づく有
乳山峯の淡雪
寒くぞあるら
し、新古今集
人丸
(十二) 敦賀灣のこ
と
(十三) 福井縣 越前
國 敦賀郡と
南條郡との境
木芽山と今
木芽山と今
近江と越前
との國境

狂言詞御前に候。ワキ「今日も山伏の御通りあらば、此方へ申し候へ。
狂言畏まつて候。

ツレ次第、旅の衣は篠懸の露けき袖やしをるらん。サシ、鴻門楯破れ、
都の外の旅衣、日も遙々の越路の末、思ひやるこそ遙かなれ。シテ、さ
て御供の人々には、ツレ、伊勢の三郎、駿河の二郎、片岡、増尾、常陸坊、
シテ、辨慶は先達の姿となりて、ツレ、主従以上十二人、未だ習はぬ旅
姿、袖の篠懸露霜を、今日分けそめていつまでの、限りもいさや白雪
の、越路の春に急ぐなり。上歌、時しも頃は二月の十日の夜、月の都を
立出でて、これやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂
の、山隠す霞ぞ春は恨めしき、下歌、浪路遙かに行く舟の、海津の浦に
著きにけり、東雲早く明けゆけば、浅茅色づく有乳山、上歌、氣比の海
宮居久しき神垣や、松の木芽山、なほ行く前に見えたるは、杣山人の
板取、河瀬の水の浅洲津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡

(四)福井縣越前國足羽郡
(五)同坂井郡
(六)石川縣加賀國江沼郡

く嵐の烈しきは、花の安宅に著きにけり。
シテ詞御急ぎ候程に、これははや安宅の湊に御著きにて候。暫くこの所に御休みあらうずるにて候。子方詞いかに辨慶。シテ御前に候。子方只今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。シテいや、何とも承らず候。子方安宅の湊に新關を立てて、山伏を固く選ぶところも申しつれ。シテ言語道斷の御事にて候ものかな。さては御下向を存じて立てたる關と存じ候。これはゆゝしき御大事にて候。先づこのかたはらにて暫く御談合あらうずるにて候。これは一大事の御事にて候間、皆々心中の通りを御意見御申しあらうずるにて候。ツレ「我等が心中には、何程の事の候べき、唯打破つて御通りあれかしと存じ候。シテ暫く仰の如く、この關一所打破つて御通りあらうずるは、易き事にて候へども、御出で候はんずる行末が御大事にて候。唯何ともして無異の儀が然るべからうずると存じ候。子方ともかく

も辨慶計らひ候へ。シテ畏まつて候。某きつと案じ出したる事の候。我等を始めて、皆々につくい山伏にて候が、何と申しても御姿隠れ御座なく候間、このまゝにては如何と存じ候。恐多き申し事にて候へども、御篠懸を除けられ、あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ、御笠を深々と召され、いかにもくたびれたる御體にて、我等より後に引下つて御通り候は、なかく人は思ひも寄り申すまじきと存じ候。子方げにこれは尤もにて候。さらば篠懸を取候へ。シテ「畏まつて候。いかに強力。狂言御前に候。シテ笈を持ちて來り候へ。狂言「畏まつて候。シテ汝が笈を御肩に置かるゝ事は、なんぼう冥加もなき事にてはなきか。先づ汝は先へ行き、關の様體を見て、誠に山伏を選むか、またさやうにもなきか、ねんごろに見て來り候へ。狂言しかじか。

シテさらば御立ちあらうずるにて候。謠げにや、紅は園生に植ゑて

も隠れなし。ツレ謠強力にはよも目をかけじと、御篠懸を脱替へて、麻の衣を御身に纏ひ、シテ謠あの強力が負ひたる笈を、子方謠義經取つて肩に懸け、ツレ笈の上には雨皮あまがは肩箱取附けて、子方綾菅笠にて顔を隠し、ツレ金剛杖にすぎり、子方足痛げなる強力にて、地ちよろよろとして歩み給ふ御有様ぞ傷はしき。シテ詞我等より後に引下つて御出であらうずるにて候。さらば皆々御通り候へ。ツレ詞承り候。

狂言詞「いかに申し候。山伏たちの大勢御通り候。ワキ詞何と、山伏の御通りあると申すか。心得であるなうく、客僧たち、これは關にて候。シテ承り候。これは南都東大寺建立の爲に、國々へ客僧を遣され候。北陸道をばこの客僧承つて罷り通り候。先づ勸に御入り候へ。

ワキ「近頃殊勝に候。勸には參らうずるにて候。さりながら、これは山伏たちに限つてとめ申す關にて候。シテさてそのいはれは候。ワキ

「さん候。頼朝、義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を頼み給ひ、十二人の作り山伏となつて御下向の由、その聞え候間、國に新關を立てて、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間この所をば某承つて、山伏をとめ申し候。殊にこれは大勢御座候間、一人も通し申すまじく候。シテ委細承り候。それは作り山伏をこそとめよと仰せ出され候。ひつらめ、よも眞の山伏をとめよとは仰せられ候まじ。狂言「いや、昨日も山伏を三人まで斬つたる上は。シテさてその斬つたる山伏は判官殿か。ワキ「あらむつかしや問答は無益むせ。一人も通し申すまじい上は候。シテさては我等をも、これにて誅せられ候はんずるな。ワキ「なか／＼のこと。シテ言語道斷かゝる不祥なる所へ來懸つて候ものかな。この上は力及ばぬこと。さらば最後の勤を始めて、尋常に誅せられうずるにて候。皆々近うわたり候へ。

ツレ「承り候。

二〇 安宅その二

シテ誦いでく最後の勤を始めん。それ山伏といつば役の優婆塞の行儀を受け、ツレ誦その身は不動明王の尊容をかたどり、シテ頭巾といつば五智の寶冠なり。ツレ十二因縁のひだをすゑて戴き、シテ九會曼荼羅の柿の篠懸、ツレ胎藏黑色の脛巾を穿き、シテさてまた八目の草鞋は、ツレ八葉の蓮華を踏まへたり。シテ出で入る息に阿吽の二字を稱へ、ツレ即身即佛の山伏を、シテ此所にて討ちとめ給はん事、ツレ明王の照覽計り難う、シテ熊野權現の御罰の當らん事、ツレ立所において、シテ疑あるべからず。地、庵阿毘羅吽欠と、數珠さらく、と押揉めば、ワキ詞近頃殊勝に候。先に承り候ひつるは、南都東大寺の勸進と仰せ候間、定めて勸進帳の御座なき事は候まじ。勸進帳をあそばされ候へ。これにて聽聞申さうずるにて候。シテ

(一)第四十五代



勸進帳

「何と勸進帳を讀めと候や。ワキなか〜のこと。シテ心得申して候。シテ詞もとより勸進帳はあらばこそ、笈の中より往來の、卷物一卷取出し、勸進帳と名附けつゝ、誦高らかにこそ讀上げけれ。それ熟、惟れば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。茲に中頃みかどおはします。御名をば、聖武皇帝と名附け奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみ難く、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く思を善途に翻して、廬舍那佛を建立す。斯程の靈場の絶えなん事を悲しみて、俊乗坊重源諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、この世にては無比の樂に誇り、當來にては數千蓮華の上に坐せん。歸

一期の浮沈

命稽首敬つて白す。』と、天も響けと讀上げたり。ワキ誦關の人々肝を消し、地地恐をなして通しけり。ワキ誦急いで御通り候へ。ワキ誦承り候。

狂言詞いかに申し上げ候。判官殿の御通り候。ワキ誦いかにこれなる強力とまれとこそ。ツレ誦すは我が君を怪しむるは、一期の浮沈極りぬと、皆一同に立歸る。シテ詞あゝ暫くあわてゝ事をし損ずな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。ワキ詞あれは此方よりとめて候。シテ詞それは何とて御とめ候ぞ。ワキ詞あの強力がちと人に似たると申す者の候程に、さてとめて候よ。シテ詞何と、人が人に似たるとは、珍しからぬ仰にて候。さて誰に似て候ぞ。ワキ詞判官殿に似たると申す者の候程に、落居落居の間とめて候。シテ詞や、言語道斷。判官殿に似申したる強力めは、一期の思出な。腹立ちや、日高くは能登の國まで指さうずると思ひつるに、僅かの笈負うて後にさがればこそ人も怪しむ

落居の間

めだれ顔

れ。總じてこの程につくし憎しと思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつ取つて、さんんに打擲す。通れとこそ。や、笈に目をかけ給ふは、誦誦盗人盗人さふな。ツレ誦方々は何故に、斯程賤しき強力に、太刀、刀を抜き給ふは、めだれ顔のふるまひは、臆病の至かと、十一人の山伏は、打刀抜きかけて、勇みかゝれる有様は、いかなる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。ワキ詞近頃誤りて候。はやゝ御通り候へ。

シテ詞先の關をば早拔群に程隔りて候間、この所に暫く御休あらうずるにて候。皆々近う御参り候へ。いかに申し上げ候。さて、只今は餘りに難儀に候ひし程に、不思議の働を仕り候事、誦誦これと申すに、君の御運盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にも當らせ給ふと思へば、愈、あさまじうこそ候へ。子方詞さては悪しくも心得ぬと存ず。いかに辨慶、さても只今の機轉、更に凡慮よりなす業にあらず。唯天

凡慮

の御加護とこそ思へ。謠關の者ども我を怪しめ、生涯限りありつる所に、とかくの是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、さんざんに打つて我を助くる、これ辨慶が謀にあらず、八幡の地、御託宣かと思へば、忝くぞ覺ゆる。クリ地、それ世は末世に及ぶと雖も、日月は未だ地に落ち給はず。たとひいかなる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰に當らぬ事やあるべき。子方サシ、げにや現在の果を見て、過去未來を知ると言ふ事、地、今に知られて身の上に、憂き年月のきさらぎや、下の十日の今日の難を、遁れつるこそ不思議なれ。子方「唯さながらに十餘人、地、夢の覺めたる心地して、互に面を合せつゝ、泣くばかりなる有様かな。クセ、然るに義經、弓馬の家を生れ來て、命を頼朝に奉り、屍を西海の浪に沈め、山野海岸に起き臥し、明す武士の、鎧の袖枕、片敷く隙も波の上、或時は舟に浮み、風波に身を任せ、或時は山脊さかの、馬蹄も見えぬ雪の内に、海少しある夕波の、立ち來る音

や須磨、明石の、とかく三年の程もなく、敵を亡し、靡く世の、その忠勤も徒に、成果つるこの身の、そも何と言へる因果ぞや。子方、謠げにや思ふ事、かなはねばこそ憂世なれと、地、知れども流石なほ、思ひ返せば、梓弓の、すぐなる人は苦しみて、讒臣はいやましに世にありて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや、恨めしの憂世や。あら怨めしの憂世や。

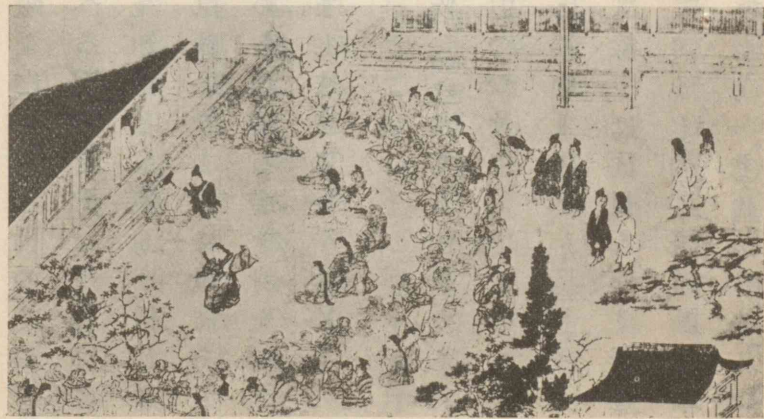
○ワキ詞、いかに誰かある。狂言詞、御前に候。ワキ、さても山伏たちに聊爾を申して、餘りに面目もなく候程に、追つつき申し、酒しゆを一つ參らせうずるにてあるぞ。汝は先へ行きてとめ申し候へ。狂言、畏まつて候。いかに申し候。さきには聊爾を申して、餘りに面目もなく候とて、關守のこれまで酒を持たせて參られて候。シテ詞、言語道斷の事やがて御目に懸らうずるにて候。狂言、しかく。シテ謠、げに、これ

聊爾

(一) 比叡山には東塔西塔三つあり、辨慶はそ
 の西塔に住んで居つた。
 (二) 藝の上手な僧侶が餘興として種々の歌や踊や劇を演じ、寺の庭などで行はれた。

も心得たり。人の情の杯に、うけて心を取らんとや。これにつきて、なほく一人に、誦心なくれそ吳織^{くれはとり}。地怪^{ぢがひ}しめらるな面々と、辨慶に諫められて、この山陰の一宿^{ひとやどり}に、さらりと圓居^{まどみ}して、所も山路の菊の酒を飲まうよ。シテ誦^{よみ}面白や山水に、地面白や山水に、杯を浮めては、流に引かる、曲水の、手先づ遮る袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。もとより辨慶は三塔の遊僧、舞延年^{まひのとし}の時の和歌。これなる山水の、落ちて巖に響くこそ、地鳴るは瀧の水。

シテ詞たべ酔ひて候程に、先達御酌に



舞 年 延

參らうずるにて候。ワキ詞さらばたべ候べし。とても事の事に、先達一さし御舞ひ候へ。シテ承り候。地誦^{ぢよみ}鳴るは瀧の水。シテ鳴るは瀧の水。地日は照るとも、絶えずとうたり。絶えずとうたり。ワキとくく立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々。暇申してさらばよとて、笈をおつ取り肩にうち懸け、虎の尾を履み毒蛇の口を遁れたる心地して、陸奥の國へと下りけり。

二一 歌謠と國民精神

藤田徳太郎

歌謠はあらゆる文學の故郷であり、源泉である。詩歌の成長も、演劇の發達も、小説の沿革も、皆その始源を歌謠に發してゐる。

文字をもたない未開人でも、知識の進歩した文明人でも、共に歌ひ共に感ずる事が出来るのは歌謠である。故に、すべての人類の情緒に觸れ、共通した感動を與へる歌謠は、時代の新古、距離の遠近を

(一) 國文學者、
 和高等學校
 教授、明治三
 十四年(二五
 一四年)下關
 市に生れた。
 沿革

超越して、永へに新しく、いづくにあつても美しい。
 しかし、歌謡がかく恆久普遍の生命を有する理由は、其所に表現された歌詞の内容にのみあるのではなくて、それに附随する音楽や舞踊の律格、曲調、或は諧和のもつ魅力にも存する事を見逃してはならない。西洋の民謡の曲調に邦語の歌詞を附した唱歌が、我々をも共鳴させ、平安時代の雅樂の曲調に現代語の歌詞を附けた唱歌が、今なほ世に行はれてゐるのも、その音楽の魅力に過半の原因があるのである。

君が代は千代に八千代にさゞれ石の

いはほとなりて苔のむすまで

(一)古今和歌六帖の略、萬葉集、古今集、家集及び當時の歌を集めて六部類に分けたもの。十二卷。

我々の心に最も嚴肅な感激の情を起させるこの國歌は、早く古今集に見えるよみ人知らずの歌で、唯初句が「我が君は」となつて居り、また古今六帖にも、初の二句を「我が君は千代にましませ」として

(一)遊僧が拍子を取つた歌。

收めてゐる。素直にして力強い表現と、單純にしてしかも巧妙な譬喩とが、この歌を誦する者に莊重な感銘を與へる。この點に於て、この歌は、我が國民に取つて恆久普遍的な魅力をもつ最も一般性に富んだものである。その當時にあつても、必ずや民間に唱和されて、多大の感銘を與へた事であらう。さうしてその後にも、各時代を通じて常に愛誦されて來た。平安時代後期の郢曲の一つである朗詠にもこの歌が歌はれ、鎌倉室町時代の僧徒の間に盛んに行はれた延年舞の遊僧拍子歌といふ小曲にも、この歌が出てゐる。この延年舞に至つて、初句を現行の國歌のやうに「君が代は」と改めた。その他、室町時代の作になる義經記や曾我物語にも、舞に合せた歌に初句を「君が代は」として、この歌を拍子を取つて歌つた事が見え、謠曲に引用された句にも、やはり初句が「君が代は」となつてゐるのによつて考へると、室町時代頃から現行のやうに改つたものと思はれる。

(一)高(たか)三(さん)隆(りゅう)達(たつ)の歌
の節(ふし)を隆(りゅう)達(たつ)は
二年(に)二(に)八(はち)年(ねん)
五(ご)年(ねん)に
隆(りゅう)達(たつ)の
集(しゅう)の
小(せう)歌(か)

傳統

中世歌謠の終りに現れて、近世歌謠の祖となつた隆達節にも「君が代は」を用ひて、隆達小歌集の巻頭を飾つてゐる。さうして「我が君」と限定せずに「君が代」と廣く言つたところに、この歌の國民歌謠としての普及性が一層増したやうに思はれるが、しかし「我が君」といふ語のもつ親愛の情は、可なり薄くなつたやうである。

この歌が明治聖代となつて國歌に採用された事は、歌謠の由來から見ても、歌詞の内容から考へても、極めて適合な事であつた。それと同時に、我が國歌の曲調が、洋樂の旋律でもなく、また近世俗樂の旋法でもなく、平安時代以來の雅樂の旋法によつてゐる事は、特に注意しなければならぬ。即ち、我が國歌が莊重森嚴で、日本國民たる幸福と誇とを深く意識させる所以は、歌詞の精神と音律曲調とが、びつたりと合致して寸分の間隙もなく、しかも歌謠の由來が歴史的背景を傳統してゐる所に、一層その深奥神祕な光澤を加へた

端的

(一)今(いま)福(ふく)井(い)縣(けん)越(こ)前(ぜん)郡(ぐん)
武(ぶ)生(せい)の國(くに)府(ふ)であ(あ)つ(つ)た(た)

からである。

この國歌に於けるやうに、歌謠は國民精神を最も端的に表現するものである。私は更に、若干の例を各時代の歌謠から抽出して、説明してみようと思ふ。

古事記や日本書紀に出てゐる上代の大歌の一つ、國思歌には次のやうな歌がある。

大和は國のまほろば たゝなづく 青垣山 籠れる
大和しうるはし

これは日本武尊が故郷を愛慕して詠みいで給うた御歌と傳へられる。この望郷の歎には、他國に出た子が、故郷の兩親を思ふ情にも相通ずるものがある。平安時代初期の歌謠を集めた催馬樂の道口といふ歌に、

道の口 武生の國府に 我はありと 親には申したべ

心あひの風や さきんだちや
 とあるのは、この心持を歌つたものである。更に、故郷の親はいかばかり我が子を慈愛の眼で見えてゐる事であらう。平安時代末期の雜藝の謠物を後白河院が編纂し給うた梁塵祕抄に出てゐる四句神歌の歌、

遊をせんとや生れけん 戲せんとや生れけん
 遊ぶ子どもの聲聞けば 我が身さへこそ搖がるれ

横行する

には、さうした親心が溢れてゐる。室町時代には人買が横行した。さうして梅若傳説や山莊太夫傳説のやうな、哀切極りない人買傳説も生じた。この時代の小歌を編集した、^(一)閑吟集の

人買船は沖を漕ぐ とても賣らるゝ身を たゞ靜かに
 漕げよ船頭殿

といふ歌には、安壽姫や廚子王丸のやうに、人買船に攫はれて行く

^(一)小歌を三百餘
 首集めたもの。
 永正十五年
 (一四七八年)
 に成つた。

^(一)江戸時代の盆
 踊歌などの民
 謡を集めたもの。
 明和八年
 (一七七一
 年)刊行。

肉親の離別の悲しさが、言外ににじみ出てゐる。下つて江戸時代の山家鳥蟲歌に見える相模の民謡

つまは萱刈り鎌倉山へ 我は子供に根芹摘む

にも、母親の慈愛が美しく現れてゐて、一家團欒の楽しい家庭も想察される。しかし、同じ書の但馬の民謡に、

親は子というて尋ねもするが 親を尋ねる子は稀な
 とあるのは、近頃の世相にも思ひ合せられる皮肉な歌であるが、この歌も、母親の優しい胸中を歌つたものと思はれる。

故郷を思ふ情、母子の愛情、それは更に博大な國家愛、崇高な君主愛にまで擴充されて、遂に日本國民の理想を、最も完全に代辯する我が國歌となつて現れたのだとも言ふ事が出來よう。さうして其所に、歌謠が最も直接的な國民精神の表白であり、最も端的な民族意識の露呈である所以を、明瞭に看取する事が出來るのである。

露呈

蓬萊の松に
たてはやそ
根のまつ
其角

二二 揚雲雀

ぬれ縁やなづなこぼるゝ土ながら
鶯の身をさかさまに初音かな
なにごとぞ花見る人のなが刀

嵐雪
其角
去來



其角筆蹟

世の中は三日見ぬ間に櫻かな
雲雀より上にやすらふ峠かな
春の海ひねもすのたりくゝかな
けろりくわんとして鳥と柳かな
長持に春ぞくれゆく衣がへ

蓼太
芭蕉
蕪村
一茶
西鶴

(一) 文學者。日本
文藝家協會
員。明治三十九
年(一九二六)和歌
山六九縣評

二三 世界を巡りて

(一) 沖野岩三郎



タコマといふ。タコマとは偉なる哉この山といふ意味である。古來

幾千年間、この地に住んで居た人たちが、仰いで以て世界最大最
の秀峯なりと思惟して居た事は、この語原によつて察知すること
が出来ぬ。かゝる秀峯を眺めた時、苟も生を日本に享けたらん程の
者は、誰しも肉眼はレニアの白雪を見て居ても、心眼は遠く海を隔
てた故國日本の富士山を凝視しないでは居られまい。のみならず、
レニアの秀峯を見る事によつて、益、富士の雄大さが増し加るので
ある。

かやうに、遠く異國の地を踏む事は、即ち深く故國の内地を踏査
する事であり、具さに異國の人情風俗を察する事は、やがて詳しく
自國の人情風俗を知る事である。されば苟も足海外の地を踏ま
んとする者は、その外遊の目的が祖國日本を知らんが爲でなければ、
何等の意味をなさない事を斷言する。

船横濱の埠頭を離れて後一週間、始めて太平洋中に美しい數個

の島を見る。言ふまでもなくハワイ群島である。ハワイは太平洋の
樂園と稱せられ、一年中紅白紫黄とりどりの美しい花を以て飾ら
れて居る。東京の市場では一箇一圓五十錢くらゐの價を有するマ
ンゴーの實も、此所では到る所鈴生りに生つて居て、小石の如く散
亂して居る。パイヤヤやパイナップルなども、殆ど無料に等しい價で
買ふ事が出来る。しかし、我等はかゝる花の絢爛や、果實の豊富に驚
く前に、先づ觀察すべき一事がある。それは、このハワイ群島がい
かなる人種によつて支へられて居るかといふ事である。

現在のハワイ群島には凡そ三十六萬の人口がある。そのうち最
も多數を占める者は、我等の同胞日本人で、その數實に十四萬を數
へる。即ちハワイの土人をはじめ、十餘種の人種を以て構成するハ
ワイ人中、我等の同胞がその半數に近いといふ事は、換言すれば、現
在のハワイ群島の約半分が、日本人の手によつて經營されて居る

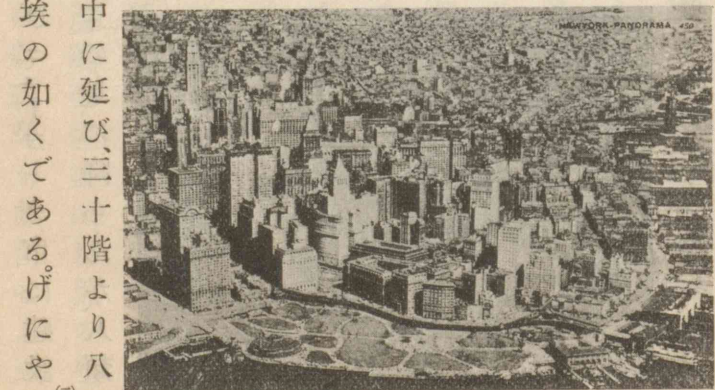


メアリカに於ける日本人小學校

といふ事になる。しかもこの地に生れ、この地に於て市民権を有する者が八萬五千の多數に上り、既に下院に數名の代議士を送り、副検事長の榮職に就いて居る者さへある。かくて我が同胞はこの太平洋中の樂園に於て、平和の戦争に偉大な勝利を得て居るのである。進んで米大陸に渡らんか、その西海岸カリフォルニア州だけにでも、凡そ十萬の同胞が活躍して居る。大正十三年以來、我等の同胞は宗教家及び貿易商等の少數を除く外、絶対に入國を禁じられて居るが、しかし自由平等を國是とする米國は、國內に於て出產したすべての人種に、アメリカ人としての市民権

(一) 紐育
(二) パビロニヤ
於ける神話に
高塔を建てる
天に達する
で、建てる神
の僭言を憎み
たが、神はそ
のたが言を中
に、混ん言を中
せし工事を止

を與へ、土地所有權を與へる。されば、現にカリフォルニア州だけにても、日本人で市民権を有する者は約三萬を算する事が出来る。しかもそれ等市民權を有する第二世が、彼等白人に比して優るとも劣るものでない事は、その學業成績に徴しても明らかである。カリフォルニア州到る所の小學校に於て、優等徽章を胸に飾る日本兒童を見る事は、我等の言ひ知れぬ愉快とするところである。

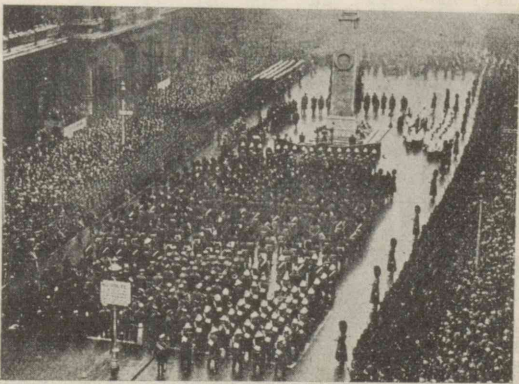


ニューヨーク市

富の國アメリカを一巡して、^(一) ニューヨーク市に出る時、其所に富力の究極を見せつけられる。家は地上に擴がらずして空中に延び、三十階より八十階にまで至る。市街は溪谷の如く、人は埃の如くである。げにやバ

ベルの塔は、今やアメリカ人によつて再びニューヨーク市に建設されつゝある。けれども神の怒にして一度この地に降らんか、人類の榮華に憧れる夢は一朝にして醒め果て、物質より精神に一轉向を見る機會が與へられるかも知れない。

一路大西洋を横ぎつてイギリスに行かんか。其所には世界大戰の瘡痕の未だ癒えざる悼ましき老大國を見る。到る所に建つ戦死者追悼の記念碑の前に供へられた花環の色は、常に新しく美しい。これ實に彼等が世界大戰の痛みを、今なほ痛みつゝある證左でなくて何であらう。彼等は當時の恐しかつた矢叫の聲を、今もなほまざくと耳底に聞いて居るのである。この



ロンドン戦死者記念碑

證左

(一)白耳義
(二)和蘭
(三)丁抹
(四)瑞西

傷ましい記念碑は、パリに行つて更に哀悼の念を増さしめる。ピカデリーもシャンゼリゼーも、等しく世界に誇るべき繁華な場所ではあるが、其所に右往左往する人々の顔色を見る時、イギリスと同じくフランスもまた衰頹期に瀕しつゝあるにあらざるかを疑はざるを得ない。次いで戦敗國たる獨逸に入る時、却つて打伐られた大樹の根柢から、生氣に充ち満ちた蘂の成長しつゝあるを見る。ベルギー、オランダ、デンマーク、スイス。これ等の小國は、著々自己の使命に向つて進みつゝある著實性と平和とを、一旅客たる我等に表示し、且つ教訓する。

イタリーは今や苦悶のうちに雄々しく絶叫しつゝある。美術の國として訪問するイタリーの町々には、餘りにも多くの武人を見、銃劍の閃光を見るのである。随つて祖國運動の隆盛は、自然の勢として旅客にも看取される。されどこの國の財政難を如何せん。武や

尊ぶべし、されど貧や悲しむべきである。嘗ては「天下の道ローマに通ず」と呼ばれたその街頭に、いかに貧者の多きことよ。宮殿の美、記念塔の大、遂に我等を推服せしめる何等の權威をも有つものではない。

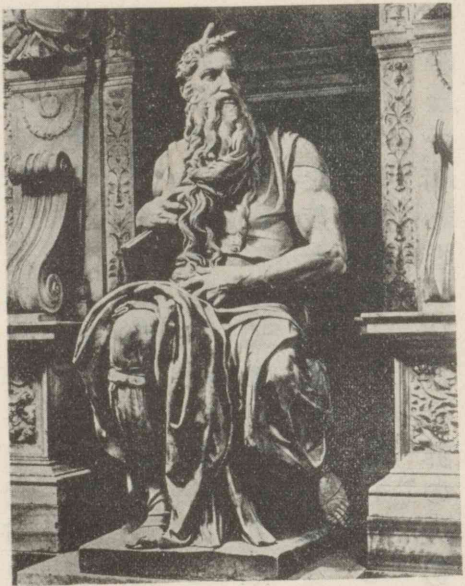
然らば現代エジプトの光景は、何の辭を以て評すべきであらうか。エジプト王クフが自己の墳墓として築いた大ピラミッドや、その子の彫刻せしめた人面獅身のスフィンクスを見る時、いかに當時のエジプトが偉大であつたかを察する事が出来る。ピラミッドは實に我が神武天皇御即位の年より三千年の太古に遡る時代に於て建造されたものであるが、この五千六百の歳月を経たピラミッドの頂上に立つ時、我等は東洋の一角に嚴然として存在する若き日本の臣民たる榮譽を思はざるを得ない。
英雄ウルエアがバビロニア王國を統一して大殿堂を築いたの

(一)埃及。

(二)金字塔。

(三)人面獅身像。

(一)亞刺比亞。



作ロエジンラケミゼーモ

は、皇紀前二千年ではないか。アブラハムが世界統一の信念を懷いてカルデアのウルを出たのは、皇紀前一千三百餘年ではないか。同じく六百五十年前に、モーゼはアラビアの曠野に理想的法典の編成を企てたではないか。全世界の榮華を一身に集め、壯麗無比のエルサレム城を築いたソロモン大王が即位したのは、皇紀前三百六十二年ではないか。殊に我が隣邦支那は、我が肇國に先だつ二千年の昔、既に文武の官制を完成し、貨幣制度を實行し、算數の學に至つては、今日の數學者をして驚歎せしめるものを教授して居たではないか。然るに今やエジプト

(一)猶太。

は如何。バビロニアは如何。ユダヤは如何。隣邦支那の情勢は如何。思
うて是に至る時、轉た感慨に堪へないものがある。
古い國々は滅びて新しい國々は興つた。若かつた英佛さへも、今
ではその根に斧を置かれた老樹のやうな状態に在る。是に於てか、
我等は祖國日本の有する重大な使命を痛感せざるを得ない。我等
は過去三千年の光輝ある歴史を顧ると同時に、先づ若き日本、明治
維新後僅々七十年の新進氣鋭なる若き日本たる自覺に立たなけ
ればならない。この若き日本が人類生存の競争場裏に立つて、共に
必死の勇を鼓して相競ふべき國々は果して何れぞ。若き日本は餘
りにその版圖が狭小である。しかし、版圖の狭小必ずしも憂ふるに
足りない。何となれば、現世界の大勢を熟視する時、嘗て版圖の廣大
を誇つた國々は、今や或は衰頽し、或は衰頽の危運に瀕しつゝある
ではないか。

版圖の狭小な日本。古くして且つ若き日本。其所に住む我等日本
人たるものは、極めて高遠な理想と、絶大な氣魄とを以て、世界の競
争場裏に邁進しなければならぬ。今や全世界は更新の機運に臨ん
で居る。而して老いたるも若きも、こゝを先途と疾驅しつゝある。若
き日本よ、汝こそ先頭第一、そのテープを切る者であらねばならぬ
行け、若き日本よ、走れ、勇ましき日本よ。群小彌次の應援に欺かる
るなかれ。汝は汝自身の内に溢るゝ氣魄を以て邁進せよ。汝が眞の
勝利は、平和と正義と愛との光が全世界を照す時である事を、深く
心に懷いて走れ。

— 歐洲物語 —

二四 光は日本より

高須芳次郎

現代の思想界は今や一大轉換期に入つた。言換へれば、日本が自
ら進んで世界に於ける思想界の大混亂を整理し、統一しなければ

(一)文學者、嘗て
梅溪と號した。
明治十三年
(一八八〇年)
大阪に生れた。

ならない秋となつた。この意味から「光は東方より」といふ言葉に對して「光は日本より」と言ひたい。

今日西洋の學問を尊重する人々は、日本には何等獨自の思想がない、哲學もない、文化もないといふ風に速斷する。果してさうであらうか。

一體、東洋文化の基調と西洋文化の基調とは、自ら異なつて居る。東洋では調和の美を尊ぶ。その主因は、すべて文化の要素を宇宙觀から想ひついて居るのであつて、宇宙の森羅萬象は、肉眼で見たところ上下あり、高低あり、大小あり、種々變化錯綜して居るが、根本的に見ると、調和に歸するのである。自然界では、地震の如き、大暴風雨の如き、驟雨の如き、動的争闘状態を呈する場合もあるが、それ等の破壊作用は、その目的とするところ、やはり調和にある。調和の爲の争闘であり、調和の爲の動搖である。結局、宇宙の眞相はどこまでも

調和に存するとする。それ故、支那では、天といふことを、西洋のゴッド以上に崇敬するのだ。靜夜、蒼茫たる天を仰げば、星辰が燦爛としてダイヤモンドを鑲めたやうに輝き、白日、空を望めば、光の女神たる太陽が麗しい光線を八方に射かけてゐる。それと共に、風雨寒暑の差別も生じて、四季が推移して行く。それ等はすべて天の作用で、天の上に大いなる調和が現れて居るといふ意味に於て、天を崇敬するのが東洋人の常習だ。「則、天去私」といふ事は、東洋獨得の精神であり、東洋哲學の一大基調をなすものである。この點に於て、日本も支那もほぼ同一で、即ち文化の基調は共に調和の上にある。調和は統一的、綜合的、歸納的で、かの分析を主とする西洋文明とは根本的に色合を異にする。西洋に於てはすべての事體を分析して、その極微に至らなければ止まない。例へば、國家に對する場合、西洋ではこれ等を分析して個人に至るのであるが、日本や支那では、個人から國

唯物
唯心

家に歸著するといふ風に、綜合的な態度を取る。これが東洋文明の西洋文明に異なる所以である。

既に調和を以て特長とする日本思想は、現代の西洋の如く唯物に偏せず、また印度の如く唯心に偏せず、物を統合して圓融自在な境地を目指して居る。随つて日本哲學の一つの特長は、唯心のみを強調せず、唯物のみを力説せず、この二つの長所を綜合した中正の道、即ち圓融自在な超越的境地にある。言換へると、唯物に即するが如くにして唯物を超越し、唯心に即するが如くにして唯心を超越し、唯物、唯心の二境を越えて、更に一段高い根本原理、即ち「まこと」といふ物心一如の境地を支配する所に立つ。平たく言へば、天に則るといふ事が出來よう。即ち一切の私を去つて、公平無私の天の道につくといふ事が、東洋人の心であり、同時に日本人の心である。日本哲學の源流は、かういふ所に一つの根を据ゑて居る。

物心一如

神ながら言舉
せぬ國

然らばさういふ思想を組織づけ、體系づけた哲學が日本にあるかどうか。日本人は西洋人のやうに、分析に得意でない。また組織體系に長けて居ない。随つて古來日本人の間には、今日西洋流にいふ哲學は、或はないかも知れぬ。我が古典に「葦原の水穂の國は、神ながら言舉せぬ國」とある。「言舉せぬ」とは、つまり言説上、組織、體系をもたぬといふ事である。或は空理、空論に走らず、道の實行を主とするといふ意味にも取れよう。由來日本人は、道德上、言ふ事よりも、先づ行ふ事を尙び、自ら哲學、宗教を組織するよりも、他の哲學、宗教の長所を採入れ、これを調和の形に於て現す上に、世界無類の能力を發現し來つた。現在でもやはりさういふ統化力を十分に持つて居る。

支那に於て發達した儒教は、今日支那本國では全く衰へたが、その精神は獨り日本に遺つて居る。營にその精神ばかりでなく、形式

及び文獻の類も悉く日本に保存されて居る。佛教は元來印度に發生し、支那を経て日本に傳はつたが、それも今日では印度、支那に衰へ、獨り日本にその精神を留めて居る。否、精神ばかりでなく、形式及び文獻も日本に保存されて居る。更に基督教は歐米から日本へ傳へられたが、或意味に於て、基督の精神は寧ろ日本に存して居ると言つてもよいからである。宗教ばかりでなく、世界各國の文化は、悉く海を越えて極東の島國たる日本に集中し、最後に日本の力によつて把持され整理されるのが常だ。何故かと言ふに、日本人が調和といふ事を重んじて、あらゆる文化を調和鹽梅し、それを日本化して一層光彩あらしむべき無比の能力を有するからである。

更に日本哲學の源流として第二に擧げなければならぬ一要素は、自然の人情を重んずる事である。人情の發現は、いはゆる國學者の「眞心」に根を置いて居ると思ふ。即ち感情の上で少しも偽る事な

ものゝあはれ

く、また少しも矯める事なく、自然のまゝに眞情を流露する。人に對する時は、その相手に眞情を傾ける。動物に對する時は、動物に眞情を注ぐ。天地自然に對しても、また情の眞實を盡すといふのが特色である。これが一步進むと、天眞爛漫の境地に達し、恰も櫻の花がぱつと咲いてぱつと散るやうな、自然の趣と一如になつた心境に入る。本居宣長はそれを「ものゝあはれ」と言つた。「ものゝあはれ」を知る事は人情の極致である。「ものゝあはれ」には理窟がない。分析解剖がない。具體的、綜合的である。また直覺的、直感的である。平家物語が今日も尙我等の心を深く打つ所以のものは、人情の機微が能く現れて居るからである。彼等衰亡に瀕した平家の人々には、何等の哲學もなければ、何等の宗教もなく、また何等目ざましい理性の働もなかつたが、獨り人情味の發露に於て、萬人を動かさずに止まないものを發揮した。即ち「ものゝあはれ」が平家物語の中心をなして居る

のだ。ところが西洋人は、人情よりも多く理性を尙び、その極、何事も理窟を以て解決しなければ止まぬ。理窟に加ふるに理窟を以てする。それは西洋人の一大長所であると共に、一大短所でもある。彼等が實驗を重んじ、實證を尙び、何事をも分析解剖しなければ止まぬのは、以上の如き傾向に根ざして居るのである。

非人情

極言すれば、西洋の考へ方はとかく調和を破壊する方に傾き易く、動もすれば理窟に捉はれ過ぎる爲、非人情になり、非人情の結果は個人的となり、勢ひ利己主義に流れ易い。この傾向は上下を一貫し、何事も權利義務で解決しようとする事になる。その爲、調和を破る事が益、激しく、結局、孟子のいはゆる「上下交征、利國危」といふ情勢となる。

現代の日本人は、動もすれば日本自身の特色たる調和の哲學を忘れて、却つて調和を破る西洋の文化に隨喜し、極端から極端に走

る西洋の學説を、何等の批判なく受容れる弊に墮して居る。若し日本人が祖先以來調和の精神を以て外來文化を統制し、外來思想を巧に支配した世界無比の消化力ある事を自覺したならば、日本の立脚地から外來思想の上に嚴正な批判を下して、取るべきは取り、捨つべきは捨てねばならぬ。吾人は日本人なり」といふ思想の上に、獨立不羈の精神を持する事が何より大切である。

諸君、今日の時勢を何と觀るか。今や行詰れる西洋文明は、何等かの解決を得なければならぬ。久しい間文明的優越を誇つた歐洲は、今や自己の作り上げた文明に自ら縛られて、どうにも身動きが出来ないのである。かくの如き有様に對して、更に來るべき新文明の曉の鐘を撞鳴し、東の空にほの／＼と創造的文明の太陽を仰ぐべき道を切開くのは、獨り我が日本を除いて、他に果して何國があるか。日本こそは東洋文明のあらゆる長所を助長し、且つ保存して居

るのである。支那、印度を禮讚する者は、その古代文化を稱揚するけれども、それ等は今日、皆我が日本の力で生命を持続して居るのだ。即ち日本あつての東洋で、東洋あつての日本ではない。日本人の優越な同化力によつて、東洋文明の命脈が維持されて來たのであると共に、今や多年閑却された東洋文明の上に、新しい再評價が加へられんとしつゝあるのだ。即ち東洋文明の新清算を始める時代に入つてゐるのだ。

要するに、現代は日本が多年に互る西洋崇拜乃至歐化主義の病弊を一掃し、正しい日本の自覺の下に、新文明を創造して行くべき時代になつたのである。即ち世界史上新しい時期を劃する日本時代が正に來たのである。

——光は日本より——

帝國讀本

改制新版 卷八 終

附 錄

一 敬讓語(口語)

一 敬讓の意を含む文語動詞

一 國語假名遣一覽

敬讓語(口語)

一名詞

- (甲) お年 お顔 お宅 お歸り お休み おいくつ おいくたり お一つ お十一 御返事 御挨拶 御機嫌 御本
- (乙) 神さま 井上さん 太郎君
- (丙) お母さま お弟さん 御尊父さま

二人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし	あなたさま	この(お)かた	どの(お)かた
わたし	あなた	その(お)かた	どなたさま
		あの(お)かた	どなた

三動詞

- (甲) 本來の敬讓語 [○印は連語を示した]
- あがる・召しあがる(食フ、飲ム)

敬讓語(口語)

あそばす・なさる(爲ル)

いらしやる(來ル、行ク、居ル)

おしやる(言フ)

おぼしめす(思フ、考ヘル)

くださる(與ヘル)

見える(來ル、居ル)

めす(呼ブ、着ル、穿ク、乗ル、買フ)

[以上、尊敬の意を含むもの]

○お出でになる、お出でなさる(來ル、行ク、居ル)

あがる、參上する(訪ネル、行ク)

あげる、さしあげる(與ヘル)

いたす、つかまつる(爲ル)

いただく、頂戴する(貰フ、食フ、飲ム)

うかがふ(聞ク、訪ネル)

ございます(居ル、有ル)

存ずる、存じ上げる(知ル)

たべる(食フ)

申す、申上げる(言フ)

まゐる(行ク、來ル)

拜見する(見ル)

拜借する(借リル)

拜讀する(讀ム)

拜聽する(聞ク)

○お目にかかる(面會スル)

お目にかける、

御覽に入れる(見セル) (以上、へり下る意、)

(丁寧の意を表すもの)

(乙) 敬讓動詞のつくり方 「○印は連語を示した」

遊ばす
なさる
下さる
に、なる

遊ばす
なさる
下さる
に、なる

御苦勞

○見て下さる、読んで下さる

(以上、尊敬の意を含むもの)

お届け
申す
申上げる
致す

お供
申す
申上げる
致す

○お届けする、お供する (以上、へり下る意のもの)

(丙) 尊敬の意の添へ方 (助動詞「れる」「られる」を附ける)

父は英書も讀まれる。

今日は佐藤君も來られる

(丁) 丁寧の意の添へ方 (助動詞「ます」を附ける)

先生も仰つしやいます。

私からも申上げます。

先生もお歌ひになります。

私もお供致します。

紙が飛びます。

四 形容詞

(甲) 「お」を附ける。

こんなにお暑いのに……………。

お恥しい次第ですが……………。

(乙) 「だす」「致します」を附ける。

これは古い(の)です。

これは新しい(の)です。

それは高い(の)です。

それは珍しい(の)です。

五 形容動詞「お」「ご」を附ける

それはお珍しからう。

若しお寒かつたら……………。

あそこはお静かです。

あそこはお静かでしたか。

そんなにご丈夫なら、もう安心ですね。

ご丁寧な御挨拶で痛み入ります。

敬讓語(口語)

六 副詞

おまめにお働きなさいませぬ。

ごゆつくりなさいませ。

ここはお静かではございません。

七 「で、ある」「だ」の意

助動詞「です」、連語「でございます」などを

用ひる。

あれは學校です。

あれは學校で ございます。

あのかたは先生で いらつしやいます。

大將はその時、少將で お出でになつた。

敬讓の意を含む文語動詞

(甲) 尊敬の意を含む語

あそばす(爲ル)
 います、ます、まします(アル、居ル、行ク、來ル)
 おはす、おはします(同前)
 おほす(言フ、言ヒツケル)
 おほす、おほしめす(思フ)
 きこしめす(聞ク、飲ム、食フ)
 しろしめす(知ル、統べ治メル)
 たてまつる(著ル、乗ル)
 たまふ、たぶ(與ヘル)
 のたまふ(言フ)

(乙)

まゐる(飲ム、食フ、著ル)
 みそなはず(見ル)
 めす(飲ム、食フ、著ル、乗ル)
 わたる(アル、居ル)
 へり下る意、丁寧の意を含むもの
 いたす、つかまつる(爲ル)
 うけたまはる(聞ク、承諾スル)
 さふらふ(アル、居ル)
 きこゆ、まうす(言フ)
 たてまつる、まゐらす(與ヘル)
 たまはる(貫フ、受ケル)
 はべり(アル、居ル)
 まかる(退ク、歸ル、行ク)
 まゐる(行ク)

國語假名遣一覽

わ (は)	わ(輪) くちわ(口輪—轡) おほわ(大輪) おもわ(面輪) はにわ(埴輪) わ(廓) くるわ(廓) わ(曲) うらわ(浦曲) いそわ(磯曲) あわ(沫) あわもり(泡盛) みなわ(水沫) わけ(分) いひわけ(言分) ことわけ(辭分) おひわけ(追分) のわき(野分) わけがら(譯柄) ひきわけ(引分) わた(綿)	わた(腸) はらわた(腸) このわた(海風腸) こわ(聲) こわいろ(聲色) こわね(聲音) こわづかひ(聲遣) こわづくろひ(聲づくろひ) こわだか(聲高) わざ(業) しわざ(仕業) ことわざ(言葉—諺) わり(割) ことわり(事割—理) しわ(皺) ひわ(鵞) たわ(依) いわし(鱒) あわつ(周章) たわし(束藁子) くわの(葱姑) たわやか(嬋娟) たわやめ(手弱女) たわむ(撓む)	よわし(弱し) かわく(乾く) さわぐ(騒ぐ) すわる(坐る) あわたし(惶し) さわやか(爽か) たわいなし 語の中や下に来る「わ」は右に 挙げた他は「は」を用ひる。例 (は)	おで(井手—堰) おなか(井中—田舎、田園) おもり(井守—蠓、蠅、蟻) お(居) おざり(居去—膝行) かもお(鴨居) しきお(敷居—闕) くもお(雲居) くらお(座居—位) とのお(殿居—宿直) まとお(園居) もとお(本居—基) まお(目居—參る、詣る) お猪(おのし) おのこ(亥の子—豚) おくび(猪首) いぬお(戌亥—乾) お(亥) おる(率) ひきおる(引率—率る、將 もちおる(持率—用、以)	お(井) おど(井戸) おげた(井桁) おぜき(井堰) おづつ(井筒) おくひ(井杭)	お(蘭) おほお(大蘭) おぐさ(蘭草)
----------	---	---	--	--	--	----------------------------

いさまし(續一勳)
 ばせま(芭蕉)
 みさま(操)
 やまら(徐)
 たまやか(嬋娟)
 たまやめ(手弱女)
 まとり(四)
 まかす(犯す)
 まがむ(拜む)
 まどす(威す)
 ます(食す)
 まさむ(治む)
 まさむ(納む)
 まさむ(藏む)
 ましむ(惜しむ)
 ましむ(教ふ)
 まふ(終ふ)
 まはる(終る)
 まめく(叫く)
 まのく(戦く)
 まどる(踊る一躍、踴)
 まる(居る)
 あをむく(仰く)
 かまろ(香る一薫)
 まます(申す)
 しまる(撓る)
 まかし(可笑し)
 まし(愛し一惜)
 くちま(口惜)
 まさなし(幼し)

さま(竿)
 つりさま(釣竿)
 みさま(水竿一棹)
 うま(魚)
 いま(魚)
 ひま(氷魚)
 しらま(白魚)
 いまのめ(魚の目一眈)
 かつま(鱧)

右の外、上には「お」を用ひ、中下には「ほ」を用ひる。例へば

親 沖弟 鬼 祖父 驚
 遅く 恐し等
 顔 潮 火の穂(焰)
 氷 郡 蟋蟀 透る 滯る
 直し 遠し 通す等

中下に「ふ」を用ひ、文語では轉呼音で「お」と發音するものがある。例へば

問 思 買 添
 願 貫 拾 習 扱
 訪 沿 乞 扱 扱
 害 違 誘 纏 纏
 事 拂 叶 憂

ち (じ)

ち(父)
 おほち(祖父)
 をち(伯父一叔父)
 ぢぢ(祖父)
 ぢぢ(老翁)
 ぢぢむさし(小父)
 すぢ(筋)
 うぢ(氏)
 ち(路)
 こうぢ(小路)
 ひぢ(肘)
 あぢ(味)
 あぢ(鱒)
 かぢ(梶)
 かぢ(楮)
 かぢ(鍛冶)
 ひぢ(泥)
 ふぢ(藤)
 ふぢば(藤袴)
 かぢぢ(麴)
 くぢら(鯨)
 ことぢ(琴柱)

候ふ 扇ぎ
 近江 今日 仰ぐ
 昨日 倒る
 貴

ねぢ(銀)
 わらぢ(草鞋)
 なんぢ(汝)
 なめくぢ(蜘蛛)
 もみぢ(紅葉)
 はぢ(耻)
 ふぢな(蒲公英)
 あぢさゐ(紫陽花)
 みそぢ(三十)
 よそぢ(四十)
 いそぢ(五十)
 むそぢ(六十)
 かぢめ(搗布)
 ぢぢむ(縮む)
 ぢぢぢ(捨る)
 とぢる(閉ぢる)
 とぢる(綴ぢる)
 とぢる(攀ぢる)
 よぢる(攀ぢる)
 ひぢる(濡ぢる)
 ひぢる(拭ぢる)
 もぢる(揉ぢる)
 ねぢける(俵る)
 あぢはふ(味ふ)

「ぢ」を用ひるのは右の語だけで、他は「じ」を用ひる。例へば

虹 雉 籤 脚躑 交る
 詰る 辱し 著し等

ず (つ)

かず(數)
 きず(傷)
 くず(葛)
 はず(管)
 ゆはず(苜)
 もず(鴟一百舌鳥)
 みず(蚯蚓)
 はずみ(機)
 ねずみ(鼠)
 あんず(杏)
 すず(鈴)
 すず(錫)
 すずむし(鈴蟲)
 すずき(鱸)
 すずな(菘)
 すずしろ(大根)
 すずめ(雀)
 すずし(生絹)
 すずろ(漫)
 すず(數珠)
 すず(從者)
 ずはえ(條)
 いしず(礎)
 くず(國柄)
 こずえ(梢)
 かならず(必ず)
 たたずむ(竹む)

なずらふ(準ふ)
 ひずむ(歪む)
 すずし(涼し)
 すずり(硯)
 まず(交す一混)
 ゆず(柚子)

右の他は「づ」を用ひる。例へば

水 屑 泉 雷 酸漿 渦
 水 屑 泉 雷 酸漿 渦
 煩ふ 貧し 續く かゝず
 らふ等

昭和十二年

大正十四年二月十二日 訂正五版發行
 昭和九年七月四日 訂正六版發行
 昭和九年十月三十日 訂正七版發行
 昭和十二年六月二十八日 訂正七版發行
 昭和十二年十二月十三日 訂正八版印刷
 昭和十二年十二月十六日 訂正八版發行

定價 卷一—卷九金六拾錢
 卷十—金五拾五錢



帝國讀本改新制版

編者	芳賀矢一
訂補者	上田萬平
同者	長谷川福平
發行者	會社 富士山房
代表者	東京市神田區神保町一丁目三番地
印刷所	坂本嘉治馬
	東京印刷株式會社
	東京市深川區白河町四丁目一番地

發行所

會社 富士山房

東京市神田區神保町一丁目三番地
 電話神田二七一—二七八番振替口座東京五〇一番



午早方

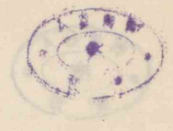
やたら

神の代

日の本

國

立



修道中卒校

小林乙三

Faint background text and a grid-like structure, possibly a library or archival record, surrounding the central text.



Kobayashi